

報 廣

東京大学理学部



目 次

表紙の説明.....	1	小柴先生の御退官によせて.....折戸 周治	17
一隅より.....高橋 武美	2	“躍”.....向山 光昭	18
高橋先生の御退官によせて.....露木 孝彦	2	向山光昭先生の御退官によせて...奈良坂純一	19
定年退職の御挨拶.....岩堀 長慶	3	理学部40年.....代谷 次夫	20
岩堀先生のご退官によせて.....落合卓四郎	4	代谷教授の御退官にあたって.....嶋田 拓	21
東大理学部を離れるにあたって...伊藤 清三	6	東大での一生.....市川 健雄	22
伊藤清三先生を送る.....藤田 宏	7	市川健雄さんと化石標本.....速水 格	23
歴史は繰り返す.....西島 和彦	8	長田多美子さんに送る.....永田 豊	24
西島先生を送るにあたって.....猪木 慶治	9	丸山恵子さんを送り	
多様体の位相幾何学30年.....田村 一郎	10	大学を考える.....熊沢 峰夫	25
田村先生を送る.....松本 幸夫	11	平川浩正先生の思い出.....坪野 公夫	27
後顧の憂い.....古谷 雅樹	13	渡辺武男先生を偲ぶ.....飯山 敏道	29
古谷先生の御退官によせて.....飯野 徹雄	15	《学部消息》.....	31
老いのくりごと.....小柴 昌俊	16		

表紙の説明

立川移転問題の解決が長引いた為に建設が遅延していた理学部7号館が完成し、2月2日披露がおこなわれた。建物の写真は学内広報No.744（2月9日号）の表紙を飾っているが、これは当日のスナップである。

7号館は地下1階地上7階、4,409㎡あり、主として情報科学科（1～6階）と遺伝子実験施設（6～7階）が使用して居る。本号35頁参照。

佐佐木 行 美

一 隅 よ り

高 橋 武 美 (化学教室)

私が理学部に入学したのは昭和20年4月で、当時、化学科の授業は一部文学部の講義室で行われていました。山上御殿（現在の山上会館）下の運動場では毎週2時間の軍事教練がりましたが、やがて夏休みとなり、終戦の詔勅を上野駅で聴きました。

遺跡調査が進んでいる運動場を化学本館のロビーから眺めながら、理学部および化学教室のこれまでの推移に思いを馳せると、この3月で理学部を去ることが、漸く実感として迫ってきます。

教授会メンバーに加えさせていただいてから約30年になりますが、その間、理学部のいろいろな方から大変お世話になりました。心から御礼を申

し上げるとともに、理学部の皆様の益々の御発展をお祈り申し上げます。

人生の終焉に向っての幾つかの段階の中の一つが過ぎて行こうとするに当って、泰西の文人の記した数行が思い出されます。

All the world's a stage, And all the men and women merely players : They have their exits and their entrances ; And one man in his time plays many parts, His acts being seven ages.

(“ As you like it ” より)

Out, out, brief candle !

(“ Macbeth ” より)

高橋先生の御退官によせて

露 木 孝 彦 (化学教室)

私が初めて高橋先生にお会いしたのは、先生が2回目のフランス留学を終えて帰国された昭和34年の秋のことでした。その頃私は反応機構の研究で学位をとりましたが、天然物の構造決定というものをやってみたくて、ニガキ科植物の苦味成分の研究を始めた許りでした。然し新しい分野での仕事なので中々涉らず、暗中摸索していましたが、隣の研究室に新進気鋭の天然有機化学の先生が帰国されたと聞き、早速教を乞い、書籍などを借りて伺ったのが最初であったと思います。その後数年してから先生の研究室に入れていただき、現在に至りました。

四半世紀の時が流れ、お別れの時が迫って参りました。思いつく儘に先生のお人柄など二、三ご紹介してみたいと思います。

先生を知る人の恐らく百人中の百人、先生は常に笑みを湛え、物腰が柔かく、丁寧で温厚な紳士という印象を持たれているのではないのでしょうか。私も長い間ご一緒の時を過ごしてきましたが、先生のようなご性格、態度には常々敬服して参りました。先生の怒ったお顔、大きな声などにはついぞ接することはありませんでした。弟子達が相手の無謀な態度やミスに腹を立てて、反駁するように先生を唆かしても、先生は決してそのようなことをなさいませんでした。弟子達と書きました

が、その帳本人は何時も私であり、先生を見習わねばと思いつつも、気短かな私は遂に今日までそれを身につけることが出来ませんでした。

大正のロマンを秘め、フランスで磨きをかけられた先生は、自由をこよなく愛されるロマンチストでいらっしやいます。個性の尊重を教育の基本方針の一つとされておられたと思います。学部4年の後半、卒業研究のために研究室に配属になった学生に対しても一人前の大人として対応され、実験を始めたその日から学生の自主性を尊重し、独創性を引き出すよう指導され、文字通り自由に研究することを任せられました。然し怠けたり、ずる休みして実験に精を出さない学生に対しては「怠けていて結局損をするのは自分自身である」と学生が自覚する迄、じっと堪え、「自由と責任」ということを先生は無言のうちに教え込まれました。

このように先生は人間を規則で縛ったり、ありふれた常識で拘束することがお嫌いではありますが、勿論これは先生ご自身にも当て嵌められていたようにお見受けします。特に俗世間の時間に縛られることがお嫌いで、常にご自分の時間というものを持っておられたことは、大学に居られる時間帯が、世間一般からは大分掛け離れていたことから推察されます。然し毎週月曜日午前中に行われる研究室の実験報告会には、第1回から恐らく最

終回まで何と無遅刻、無欠席の素晴らしい成績を挙げておられます。もっともこれは先生がお見えになった時をもって始まりということになっていますが……。

温厚な先生のご風貌からはちょっと想像しにくいことですが、先生は大変頑固な一面を持っておられます。いろいろご紹介したいこともあります。紙面が残りが少なくなりましたので一つだけお話しします。先生は長年ヘビースモーカーでいらっしやいました。年末の大掃除の日、教授室の本棚のガラスに付着した煙草のヤニを落すのに毎年苦勞しましたが、5年前にプツリと禁煙なさいました。それまでの煙草好きを見て来た弟子達は、それが何時迄続くか面白半分に見守っていましたが、持前の頑固さ——先生はそれを意志強固であると反論されるでしょうが——を發揮され、今では禁煙車でなければ汽車には乗れないとおっしゃる程筋金入りになられました。先生のご健康のためにもこの頑固さは是非持続されるよう念じております。

何から書き始めようかと迷いつつペンをとりましたが、いざ書き始めますと、後から後から色々なことが思い出され尽きることがありません。先生、本当に長い間ご指導をいただき有難うございました。今後とも時間を超越して、益々ご活躍下さいませ様お祈り申し上げます。

定年退職の御挨拶

岩 堀 長 慶 (数学教室)

東大教養学部の助手になったのが昭和24年11月で、以後10年程駒場生活をし、昭和34年に本郷の理学部に移り、27年の月日が夢のように速く流れ来月は定年退官の月となりました。理学部の皆様との思い出や外国に出張させて頂いた時の楽しかった思い出が次々に浮かんで来ります。昭和35年

にプリンストンの研究所で2年の間、生れて始めて外国の生活というものを味わいました。物理の宮沢先生(当時新婚直後の)と知り合い楽しい会話を続けた思い出が未だ消えません。東大に帰り昭和40年に再びアメリカの群論学会(コロラド大学にて一ヶ月)、バークレイのカリフォルニア大

とパリ大、ノースイースタン大での講義に出張して42年に帰り、翌年から東大紛争が始まりました。たまたま教室主任で多忙となりましたが、この紛争のせいで他の教室の多くの先生方とも種々の話をする機会が得られました。理学部の先生方の個性というものも始めて知ることが出来、世間が広がった思いもしました。学生達とも心を開いて話す状態が起こった様な気がします。ただ、数学を熱心にやっていたのは上述の昭和35年～42年だったと思います。新しい予想を思いつき、実験を繰返して、最後に証明まで確立できた喜びというものは一生涯のうちあまり度々は得られない——ということは紛争の頃から身にしみて実感しました。その後は学生指導の方により身をいれた様です。しかし驚いたのは学生の中にも何人か驚くべき才能の持主がいて、指導教官である筈の私より遥に実力が上であることが会うたびに明確になって行くことでした。特に若くして逝かれた新谷卓郎助教授の思い出は消えることがありません。性格は

子供のような純粹さと人のよさに満ち溢れていましたが抜群の才能は助手になった頃からすでに世界的に認められていました。年月が流れ、若い頃の大先輩の先生方はよその大学や研究所に移られ、教授会に出ても己れの過した年月の長さの実感と、若い活動的な諸先生の熱気を感じます。理学部から上智大学へ移ってもう暫らく教員生活を続けて行くことになりましたが、新世界へ行く楽しみと共に、人生の主要部分を過ぎて来た理学部との別れの気持はいわば平家物語の始の部分の茫然と聞いているような気分です。若い頃夢中で過した理学部生活の楽しさ、外国で見て来た夢のような世界、学生達との論争を続けた紛争時代の夢中で送った月日、驚くような才能を持ちながら内気に話し掛ける学生達、そして気がついて見ると、教授や助教授となって活躍している姿から受ける感動——このような気持と共に長い間御世話になった理学部の諸先生方、事務の方々には心から御礼申し上げて御別れの挨拶とさせていただきます。

岩堀先生のご退官によせて

落 合 卓四郎 (数学教室)

岩堀長慶先生は、本年3月停年退官されることになりました。先生は昭和23年東京大学理学部数学科を卒業され、引続き大学院生、翌年には教養学部の助手になられました。同学部講師、助教授をへて、昭和34年に助教授として理学部にお移りになり、昭和39年以来理学部教授として、ご研究と後進の指導にあたってこられました。

私は、数学科に進学する前から名著「ベクトル解析」で先生のお名前を知っておりましたが、先生と近付きになったのは、3年になって先生による幾何学の講義を聴講したときでした。私がそれまで想像していた数学と、教養部4学期で学ぶ専門課程の高度に抽象化された数学とのギャップの余りの大きさに殆んど落ちこぼれの状態で本郷に

進学してきた私にとって、タイミング良く先生による講義を聴講できたのは、砂漠でオアシスにたどりついたようなものでした。「Lie 群論の初歩」が講義内容でした。数学界では、その名講義ぶりでとくに有名な先生ですが、その分り易い講義をささえる3本柱が、私が始めて聴講したこの講義においても現われていました。すなわち、(1)抽象的理論の理解を助けるための簡単ではあるが、おもしろい例を数多く話す。(2)学生の実力に応じた解答が出る摩訶不思議な演習およびレポート問題を出す。(3)講義中に「これはこうなるのだが、どうしてか説明して下さい」と学生を挑発して、その解答ぶりで聴講している学生の理解度をチェックする。これだけの気配りのある講義には、さす

がの私も落ちこぼれることなくむしろ幾何学に encouraging されるものを感じることができました。したがって4年での数学講究では、迷うことなく先生の幾何学セミナーを取りました。このセミナーでは特に話し方について厳しい指導をいただきました。教育的破門宣告または教育的無視の恐れなくして、いいかげんな準備で先生のセミナーで話しをすることができませんでした。したがって良く勉強することとなり、自然の成り行きとして、私は微分幾何学を生涯の研究分野として選ぶことになりました。「君は良く勉強している割りには理解度が今ひとつだ。良い機会だから実単純 Lie 群の分類についてまとめてレポートしなさい」とあるとき指示をいただきました。現在では、これについて記述した教科書がありますが、当時では専門家の間の常識でしかありませんでした。散見する論文の収集から始めて、今まで得た知識を総動員して少しずつレポートを仕上げることができました。これによって今まで何かばらばらであった知識が互いに有機的につながるのを実感できて今から思うと実に充実した時期でした。先生は打ち出の小づちをお持ちのごとく、多くの良間を持っておられ、タイミング良く学生にお出しになるのを、いつも羨望の気持をもってながめておりますが、私もその恩恵にあずかった一人ということになります。落ちこぼれ寸前の学生だった私が曲りなりにも、この理学部で教鞭をとる榮譽に浴しているのは、まさに先生のおかげと深く感謝しているしだいです。

一年間ご指導いただいた後、先生は長期間の海外出張にお出かけになり、私も続いて米国に留学してから、あちらこちら転々としたために10年後に当理学部に赴任してくるまで直接に先生のご指導を受ける機会はありませんでした。

昭和54年から、この理学部で先生とご一緒させていただくことになりました。そこで学生達が先生と友達のごとく話しをし、一緒に赤ちょうちんに飲みに行き、一緒に泊りがけで旅行するのを見て、正直言ってびっくりしてしまいました。私が

学生時代受けた先生の印象とずい分違うように思えたからです。先生におたずねすると、東大紛争中に経験されたことが、おおきく影響しているとのことでした。学生の性格を正確に知る必要性を痛感され、古来から伝わる四柱推命などの占いの手法と巧みな話述を通して、精神分析医顔まけの性格分析をされるまでになりました。この結果をふまえ、現在の学生には、私の学生時代と違った接し方が必要とお考えになっているのでしょうか。

先生の多くの研究業績の中で、特に p 進体上の代数群の理論が有名です。古典的な複素数体上の代数群の所謂 parabolic 部分群に対応する部分群を、人々は先生の業績にちなんで岩堀部分群と呼んでいます。英語では, Iwahoric subgroup と書かれます。古典的な場合は, Parabolic subgroup ですから, Iwaholic subgroup と書かれるべきですが、日本人は l と r の区別をしないから Iwahori をそのままつかって Iwahoric subgroup と書かれることになったそうです。

力不足で、近頃益々学生を指導する難かしさを痛感している私は、落ちこぼれ寸前の多くの学生を立ち直らせた先生から、指導の要点などお教えいいただくことが、まだ多く残っているのに、先生の停年退官をむかえることになったのは残念でなりません。

四月から上智大学に行かれます。ご健康にくれぐれも留意され益々のご発展を祈っています。

東大理学部を離れるにあたって

伊藤清三(数学教室)

毎年3月になると理学部広報で、還暦を迎えて東大を退官される先生方の記事を拝見していましたが、とうとう私自身の番になりました。最近では平均寿命も長くなりまして、私が学生時代に御指導いただいた先生方の多くはまだ御健在で、自分自身が還暦と言われても未だ若輩の域を出ていないような気が致します。しかしまた一方では、かつて自分の教えた学生が、その専門分野において世界の桧舞台に出て活躍しているのを見ると、やはり自分の年齢の重みを感じ、東大を停年退官するという一つの節目として、誠に感無量のものがあります。

私は昭和22年4月、戦後の復興がほとんど始まっていない時に、名古屋大学理学部数学科に入学しました。そうして、戦時中に爆風で割れた窓ガラスがまだ完全には修復されていない講義室で、冬はオーバーの襟を立てたまま講義を聞きました。卒業後も名大に勤務致しましたが、昭和32年に東大数学教室からお誘いをいただき、同年9月から東大に参りまして、今日に至るまでここに勤めさせていただきました。

東大は(それ以前には学会に出席するため門をくぐったことが数回あるだけで)私にとって未知の世界でしたが、数学教室の諸先生方、諸先輩方が研究面でも個人的にも親切に御指導下さり、同僚諸氏も暖く迎えて下さったことは、今更ここで触れるまでもないことながら、理学部全体の和やかな雰囲気や研究上の結びつきも私の第一印象として忘れることができません。ことに物理学教室の山内恭彦先生、小谷正雄先生、今井功先生、加藤敏夫先生らの数学に関する御理解と御造詣に感服致しました。その頃から加藤敏夫先生と数学教室の吉田耕作先生とが合同で定期的にセミナーを開か

れ、その席上で山内恭彦先生からも親しく話しかけて下さり、加藤先生、今井先生や藤田宏さん(当時は物理学教室所属、現在数学教室教授)から数理論理学、特に流体の運動方程式に関する多くの知識を授けていただきました。現在は私の直接関係する分野では、数学・物理両教室合同のこのような定期的セミナーは行なわれていませんが、この吉田-加藤セミナーから発展した関数解析学のセミナーが、毎週火曜日の3時半から数学教室で行なわれております。最近、物理学教室の江口さんと数学教室の服部・落合両氏とが、統一場理論と幾何学との接点をめぐって、非公式ながら定期的にセミナーをしておられると承りました。このような異なる教室間の相互理解の雰囲気と伝統が永遠に続くよう願っています。

私の東大在職中の最大の事件は、大変残念なことながら、大学紛争であったと言わざるを得ません。これは、国公立を問わず、全国の大部分の大学に伝染病のように蔓延し、一年余り遅れて一部の高校まで真似したようでした。紛争收拾に当っては、多くの大学において何らかの“改革”が行なわれましたが、私の感じました限りにおいては本学は最も“しっかりしていた”大学のひとつであり、その中でも理学部は最もしっかりした学部だったと思います。これは本学の、特に理学部の先生方の(私自身は度外視し、かつ他の先生方に対しては僭越なことを申しますが)それぞれの専門分野における研究・教育に関する実力と信念の然らしむる所ではなからうかと感じました。このような先生方と共に半生を過ごすことができたのは非力ながら研究者の道を選んだ私にとりまして、最大の幸福であったと思っています。

最も印象の強かったことに話題を限りまして大

変かたよった回想録になりました。時として“独断と偏見”に基づく発言も致しまして皆様に御迷惑をおかけしたこともあったかと思いますが、東大理学部在職の三十年間を大過なく勤めさせてい

ただけましたことを感謝しております。理学部の皆様の御健康と、この理学部が今後ますますアカデミックに発展していくことを祈りまして、私の最後の御挨拶と致します。

伊藤清三先生を送る

藤田 宏（数学教室）

この3月で伊藤清三先生が東大を停年退官されることになりました。伊藤先生は、昭和32年以来の30年間の東大在任中に多くの英才を育てられたのですが、その方たちが理学部外あるいは学外で活動しておられることもあって、数学教室のメンバーの中で直接的なお付き合いの長かった私が伊藤先生を送る辞を書かせて頂くことになりました。実際、私は数学教室に参加して以来の20年間、学問的には伊藤先生に兄事しながらも、伊藤先生の御好意に甘えて友達付き合いをさせて頂きましたし、研究やセミナーにおいて絶えず御一緒に参りました。この間の御友誼に免じて、私自身の停年も遠くないのですが、あえて伊藤先生への送別の辞を記させて頂きます。

私の印象で申し上げれば、伊藤先生は学者としても教育者としても、志を高く持ち、条理と節操を重んずる“志操の人”であるということになります。

伊藤先生の御専門は関数解析であり、また関数解析の手法による偏微分方程式の研究です。具体的には、変数係数の放物型方程式の初期値・境界値問題の基本解の構成や増大度の大きい係数を持った楕円型方程式にともなう理想境界の理論の樹立など、それぞれの分野で画期的な成果を挙げられました。また、私などは特に啓発されたのですが、ナビエ・ストークス方程式の正則解の構成、半線型放物型方程式の解の爆発など、数理論や現象の解析に直結した佳作も物にしておられます。

関数解析は、ヒルベルト空間論、バナッハ空間論などの大枠は戦前に仕上っていたのですが、戦争中の吉田耕作先生（およびE. Hille）の半群理論、加藤敏夫先生のハミルトン作用素の理論が契機となり、偏微分方程式の研究に威力を発揮する作用素論が昭和30年代に隆盛となりました。この頃、ちょうど数理解析研究所誕生の胎動ともいふべき数理科学の総合研究が行われたこともあって、吉田-加藤両先生が合同のセミナーを数学教室で行われましたが、当時、関数解析の研究の世界的な中心の一つであったと思います。そこで多くの業績が発表され、多くの学者が育ちましたが吉田-加藤の両巨頭と若手研究者の間であって大番頭とも若者頭ともいふべき役割りを果されたのが伊藤先生でした。したがって、今日、吉田あるいは加藤の門下とみなされる関数解析の研究者の多くが（私もその一人です）、伊藤先生の学恩を蒙っています。

その後、時代と共に関数解析は数学の諸分野の支えとして普及しましたが、研究の形態は却って分化し、たとえば、非線型問題への応用、数値解析の基礎づけ、あるいは、代数解析の母体というように個別化され、あるいは止揚されていきました。この間、伊藤先生は、後輩には関数解析を土台とする新分野への挑戦をすすめられたのですが御自身は具体的な問題の本質を抽象的方法で解明するという関数解析の原点に立ち、関数解析自体への愛情を込めて研究・教育に努められました。

全国的な関数解析の研究組織の中心的役割りを担いつづけて来られたのも、このお気持ちに基づくものと思います。

伊藤先生の、論理を重じ整合性を厳しく追求される完全主義は、教授会の席上の御発言からも十分に印象的であったかと思いますが、数学科の学生に対する訓育では著効がありました。伊藤先生の担当されるルベグ積分の講義は、無限を扱うのに必須の精妙さと厳格さを初体験する場であったと学生の多くが語っていました。

お人柄においても、伊藤先生の誠実さ・律儀さ

は古典的ともいえるほどで、私など半生に亘るお付き合いで一度も伊藤先生が信義にもとる言動をされたことを見たことがありません。といて、伊藤先生は単純な堅物（かたぶつ）ではありません。宴席などでアルコールを避けてジュースだけを飲みながら、漢字の素養と駄洒落のセンスを駆使されて座を盛り上げられる力柄は数学科の七不思議の一つです。

学問に対する志操を保ち、人間味も豊かな伊藤先生が、御退官後も、益々、面目を発揮され御活躍されることを祈って止みません。

歴史は繰り返す

西島和彦（物理学教室）

東大のように大きな大学における種々の問題に対する意志決定、そして結論に到るまでの過程には際立った特徴がある。先づこの集団の構成メンバーは数が多く、かつ大変に個性的である。このことから簡単な結論が出る。

種々な問題に対する東大の決定は常に中庸を得たものであり、常識から外れた結論が得られることはない。

各人が大変に個性的であるということは、あらゆる種類の意見が存在することであり、換言すれば完全にランダムだということである。それにメンバーの数が多いという条件を加えると東大はどうやら統計力学の対象になりそうである。そして温度は外的条件により決められる。

東大紛争の時には温度が上昇し、相変化が惹き起こされるかと思ったこともあった。時には局所的に温度が高くなり、何か起こりそうになっても結局相変化は見られない。このことは良く言えば東大の安定性、悪く言えば東大の保守性と言えるであろう。その結果、東大は似たような条件の下では常に似たような反応を示すということができ

その行動は古典力学的である。それに反して、もっと小規模の大学では結論に揺動が見られ、予期できなかった変化が生ずることがあり、その意味で量子力学的である。

上の一般論に対して具体例を挙げることをお許しいただきたい。今から8年前に、宇宙航空研究所を宇宙科学研究所に移行させようとした際に、多くの部門が東大に残留することを望んだ。この時にこの問題を議論するための懇談会の主査を担当された水野伝特別補佐（当時）は、この組織を利用してその当時議論の対象となっていた総合大学院を実現しようとされた。水野構想では、総合科学、医学薬学、総合理工学、人間科学という四研究群が考えられ、残留組は総合理工学研究群に収容される筈であった。しかし結果としては、境界領域研究施設が工学部内に置かれてけりとなった。

最近、この施設の時限到来に対応するために再びその転換が問題となった。それに関して、学内からは日本文化、特に近代に関する部門とか、生物関係の部門をも持つセンターをという声があっ

た。しかしそれ等と正反対の声もあり、結果としては先端科学技術に絞られたそうである。以上の二つの出来事は全く同じパターンに従っている。

似たようなことは、立川や柏のキャンパス問題でも生じている。これも、各部局が思い思いの青写真を作る初期の興奮期から、学生の教育とか移動に伴う種々の不便を思い、遂には何故本郷ではいけないかと言いつつ反省期まで、やはり同じパ

ターンが繰返された。

東大の将来における活性化のためには、東大はもっと量子力学的な種々の可能性を秘めた組織にならなければいけないのではないであろうか？

最後になりましたが、約二十年間にわたる私の東大在職中には多くの方々にお世話になりました。この紙面をお借りして御礼申し上げます。

西島先生を送るにあたって

猪木 慶治 (物理学教室)

「西島-ゲルマンの法則」で西島先生のお名前は、学部学生のころから伺っていた。しかし先生にはじめてお目にかかったのは30年前、私が大学院に入りたての頃であった。当時、先生は大阪市立大学から米国のイリノイ大学教授として赴任される直前であった。素粒子論の集中講義を本郷でされ、我々その時大いに感銘を受けたのだった。

その後、先生は昭和41年、古巣の本学理学部物理学教室の教授に就任され、以後一貫して物理学科の教育、研究の中心的指導者として数多くの優秀な卒業生を研究者として世に送り出された。その間、物理学教室主任、理学部長、総長特別補佐などをも務められた。そして本年4月からは東京大学を後にされ、京都大学基礎物理学研究所所長として専念される事となった。先生はこのように学内、学外を問わず全国的視野からの科学行政にも多大の御尽力をなさっている。更にはソ連アカデミー外国人会員、ドイツ自然科学アカデミー・レオポルディナ会員として学術の国際交流にも並々ならぬ努力をなさっている。

先生の御専門は、素粒子論、場の理論であるが理論物理学全般に御造詣が深く、先生独自の深い洞察力で、現象論から純粋理論までの広い分野にわたって活躍してこられた。なかんずく素粒子物

理学の分野では指導的役割を果たしてこられ、 η チャージ (ストレンジネス) の発見、その他、相対論的束縛状態の理論、場の理論の分散式による定式化、くり込み群やゲージ理論の研究など多大の業績をあげられた。その為に日本学士院賞をはじめとして多くの榮譽を受けられたことは皆様よく御存知のことで、今更私が申上げるまでもない。また先生の名講義に基づく Fundamental Particles, Fields and Particles をはじめとする数々の名著は、国内外で愛読され幾多の研究者を育てている。

こう書いてくると先生は、こちこちの真面目一筋人間と思われるかも知れないが、先生は趣味の面でも多才である。何年前か、西島先生の名札を見て、私の友人が「あ、大車輪の選手がいる。」と言った。東京高校の時代は、もっとスマートであったか、腕力が抜群だったのであろう。また大阪市立大学時代は一日に4本づつ映画をごらんになったと伺っている。大学へ行かれる前に2本、帰りに他の2本立てをごらんになった由。案外その頃、ストレンジネスを思いつかれたのかも知れないが詳細はチェックしていない。その昔、ゲッチンゲンにいらっしやった頃は、町に8軒映画館が

あったので、1週間に1本だけは見逃したとも伺った。語学もお得意でフランス語は映画をみて勉強されたと人づてに聞いたことがある。ピサ大学ではイタリア語で講義されたが、そのイタリア語は中央線の電車の中で勉強されたらしい。またパーティーやコンパでお酒が十分入って興がのってこられるとドイツ語がポンポンとび出し、そのあとドイツ語でリードを歌われる。

先生の御性格には温厚さと厳しさの、一見相反する二つが同居していて、優しいけれどもこわいというのが、われわれの共通の感想ではないかと思う。強い正義感を持たれ、何事にもすじを通すことを重んじられるので、みんなから頼りにされ人々の尊敬をうけてこられた。また、理学部長時

代、学生自治会との話し合いの際も一切の挑発にのらず、常に冷静に、証明なしの結論だけを述べられるので、自治会にとっては手恐い存在だったと聞いている。時々、おだやかな笑顔でしんらつなことをおっしゃるので西島語録という表現がある程、先生はその独得の考え方と、ひらめきをしばしば示された。また、沢山の温かいWitやひょうきんなユーモアでも楽しませて頂いた。

先生は本学を御退官後は、京都大学基礎物理学研究所長として専念され、全国的な視野にたって理論物理学のこれから進むべき道のかじとりをされる。先生が御健康に注意されて、教育、研究、科学行政において今後もますます御活躍されるようお祈り申し上げます。

多様体の位相幾何学 30年

田 村 一 郎 (数学教室)

理学部数学科に入学してから30余年になります。その間に教養学部へ3年間行っていたほかは、ずっと理学部数学教室に在籍していたわけで、ずいぶん長い時間をここで過したものと驚くとともに、人生の主な部分を気持よく送ることのできた理学部に愛着の念を新たにし、その間の理学部の皆様のご厚誼に深く感謝する次第です。

当然のことですが、30数年の間に数学教室はずいぶん変りました。学生時代には、学生や院生が集まることができるのは小さな用務員室だけという寺小屋の雰囲気の中で、講義も非常に基礎的なものからご自身の研究につながる専門的なものまで、先生がたそれぞれのお考えで独立に行われていました。先生の数も少なく、講義はしたがって分野的にかなり片よりがあるものだったと思います。そのため、何か新しい方面のことをやろうと

する学生は、独力で論文を捜して勉強していかなければならないハングリーな状態におかれていました。私のようにその頃まだ新しかった位相幾何学を目指したものは全く手さぐりで進まざるをえず、大学院のときなど長いトンネル時代をすごしました。しかし、幸運にも多様体の位相幾何学が1950年代後半から急激に発展し、その潮流に乗ったかたちで何とか研究者になり、その後は幾何学らしい幾何学を追求して研究をつづけることができました。

この30年間に講義のカリキュラムはすっかり整備され、各分野は体系化されて、順序を追って単位をとっていけば知識が自然に身につくような定食コースができてきました。学生はこの定食で栄養を十分にとり、研究者としてのスタートラインにつくことができます。しかしハングリーな気持

は消えてしまって、知識の中につかっているのが勉強と思っている学生が増えてきた感じがしてなりません。30年間の各分野での進歩を考えれば、多くの予備知識が要求されるのは明らかですが、その修得のために、研究推進の原動力となるハングリーな気持が失われてしまったのでは困ります。よく、「東大の学生は学部するときにはアメリカの一流大学の学生より優れているが、大学院後半でのダッシュ力が足りない」と言われますが、このあたりにその原因の一つがあるように思います。カリキュラムを編成するのに栄養学の立場からだけでなく、心理学乃至精神学の立場からの検討が必要ではないでしょうか。

以前、数学者や理論物理学者の頭脳流出がさわがれたことがあります。数学や理論物理学が国際化のパイオニアだったわけです。理学部の他の学科でも同様だったと思います。ところが、そういうことが常識化してしまったからかも知れませんが、頭脳流出という言葉は近頃聞かれなくなりました。それに代って、貿易黒字の問題が新聞紙上を賑はし、自動車が国際化の花形となっています。1965年夏に、サンフランシスコの近くのハイウェイで一台のダットサンがのろのろ走っているのを見たことがあります。ゴテゴテした不格好な外観は非常に滑稽に見えました。一方、その頃日本ではアメリカ車が高級車の代表格となっていました。ところが最近では輸入されるアメリカ車は

せいぜい年間千台程度で、たまに走っていても何となく組ではないかと変んな眼で見られます。この20数年の自動車産業の国際化は大変なもので、これに比べると理学における国際化の伸びは遅々としているように見えます。

もっとも、自動車の対米輸出の中心は中、小型のファミリーカーで、一部スポーツカーが含まれていますが、ハイレベルの車については未だしというところではあります。理学部における国際化は、車でたとえばハイレベルの車についての国際化ということになるでしょうから単純な比較はできません。日本では舶来信仰が根強く、ベンツやボルシェソックりの車が平気で作られ、好評を博しています。しかし、すべてがそういうわけではありません。ツインカム車が多数走っているのは日本だけだし、昨年トヨタから発売されたソアラはベンツやBMWにまともに挑戦しようという強い意気込みを感じさせる車です。事実、大出力のツインカム・ターボ・エンジンや新しい型のサスペンションなど、ベンツやBMWを凌ぐのではないと思う部分もあります。ソアラは未だ輸出されていませんが、そのうち輸出されてハイレベルな車でも日本が世界を制覇するようになるかもしれません。しかしそれよりも早く、理学部の諸学科についての貿易黒字が国際的にさわがれ、各国で対策が講じられる時代が来ることを切に願っております。

田村先生を送る

松本幸夫(数学教室)

今から20数年前のある日、理学部1号館の小講義室で、幾何学の最初の授業の始まるのを待ちながらざわめいていた我々学部学生の前に、颯爽と入って来られた先生の姿は大変印象的であった。そして、何の前置きもなく、黒板の左上にアーベ

ル群の系列を書かれ、チェーン複体、ホモロジー群、その性質、等の議論をぐいぐいと展開されていった。その迫力に我々はただ圧倒される思いだった。時どき、左手の中指を頬に軽くあて、何かをちょっと考えられる風情であったが、それが

何とも格好良かった。当時としてはまだ珍しい皮の肘当てのついたブレザーを着ていらっしまったことも、なぜか記憶に残っている。

これが田村先生との出会いだった。先生はフランス、アメリカにおける数年間の研究生活を終え帰国されたばかりで、日本に新しい微分位相幾何学を育て上げようという意気に燃えていらっしまった頃だったと思う。もうふた昔も前のことであるが、先生の雰囲気はこのころから今に到るまで少しも変わっていない。先生の数学を研究される態度には、現在でも初々しい純粋さとロマンを感じてしまう。

先生の数多くの御研究の中でも、全ての奇数次元球面上に余次元1の葉層構造を構成された御仕事は、とりわけ忘れ難いものである。それは、理学部の助手にさせていただいて2年目の1971年のことだったと思う。奇数次元の球面上に余次元1葉層構造が存在するか？という問題は、当時最も関心を持たれていた問題であった。我々の仲間内でも、ああでもないこうでもない、寄るとさわると議論していたが、ある時、先生が晴々とした顔でやって来られ、“僕出来たよ、君達、何なら1週間くらい待ってやろうか”とおっしゃったのにはショックを受けた。進歩とはこういうことなのか、と目を開かれる思いがした。数学という重い歯車が、目の前で、確実に、きしみながら回転した、というイメージが頭をかすめたのを覚えている。

御自身の研究ばかりでなく、先生は研究体制の整備にも多大の努力を払われた。日本数学会理事長、東京大学評議員等の学内外の要職を務められ、また、日本学術会議、日本学術振興会、文部省学術審議会等々の委員にも選ばれるなど、先生の御活躍は枚挙にいとまがない。これらの場でも多くの御苦勞がおりだったろうと推察されるが、私ごととき若輩ものには知る由もない。

先生の人間的大きさを痛感するのは、このような学内外の御活躍と御自身の研究の両方を、少くとも傍目には、実に何なくこなされたことである。

実際、上に述べた葉層構造の存在問題の解決も、教室主任として最も多忙な時期になされたとうかがっている。

余裕のある生活態度とでも言うのだろうか。しかも、この余裕の大きさには、先生の多彩な趣味を見るとき、更に驚かされる。お若い頃、油絵に凝られ、展覧会には何度も入選されたそうであるし、囲碁、将棋の腕前も相当なものとうかがっている。残念ながら私の“棋力”は、測定不可能な程微弱であるので、先生の実力がどれ程のものか全然見当もつかない。

ゴルフは既に20年のキャリアをお持ちである。また車のウンチクも大変なもので、今でも新型の車種に関する諸情報に精通しておられる。

この春、田村先生は理学部を定年退官される。学生時代からずっと御指導いただいたものとして、いま先生を送る文章を書いているが、まるで全体が非現実的に思えて、実感が湧かない。まして先生は、現在、Seifert 予想という大きな問題に取り組んでおられ、毎日のように研究の進展に関してお話しをうかがっているような状況である。

我々学生の前に颯爽と姿を現わされた先生が、また颯爽と理学部を去って行かれる。

先生、どうぞいつまでもお元気で。

後 顧 の 憂 い

古 谷 雅 樹 (植物学教室)

私が植物学科の前期学生になったのは昭和21年4月だから、振り返ってみると、それから40年経つうち30年も理学部の御世話になって仕舞ったことになる。私が学生当時の教室は、第一講座が分類学の本田正次先生で、第二講座が生理学の田宮博先生であった。両先生の学問は、それぞれ類型的アプローチと要素論的アプローチの代表として殆ど交わるところもなく、各々の世界が厳然と存在していた。ところが現在はどうかであろうか。生命現象の研究は理学部の各研究室は勿論、農・医・薬・工の各学部を問わず、同じ土俵で生命の本質に迫ろうとしている。一見、生物学の分野は多岐に広がりつつあるように見えるが、実は根が一つになって共通の言葉で話ができるようになってきたのである。

これは学問にとっては素晴らしいことであるが、生物科学の進む彼方を眺めるとき、理学部の設備や予算を考えると、心の重くなる昨今である。例えば、今では誰もがモノクロナル抗体とか、遺伝子のクローニングとか耳にする時代になった。確かに一度モノクロナル抗体を得れば、細胞内に微量存在する物質の抽出・精製・検出・定量などが飛躍的に容易になるし、遺伝子の構造を知ることには天秤で物の重さを計るのに匹敵する基礎的知見である。それでは、モノクロナル抗体を1つ得るのに、また遺伝子を1つクローニングするのに、どの様な施設や機器が必要であり、どの位の費用がかかるか、御存じですか。私自身は幸い、岡崎国立共同研究機構で客員部門を与えられていたのでモノクロナル抗体作り、その他の新しい設備や装置を要する仕事はそちらで出来たが、私どもの「フィトクロムの分子構造解析」という小さな課題ですら、理学部の設備と予算だけではとても国

際競争に耐えられなくなっているのである。高エネルギー研のトリスタン建設計画に比べれば桁違いに小さいとはいえ、生命科学の先端は個人の努力だけでは及ばない所に達して仕舞い、巨大な組織と施設を要する分野が急速に増えつつあるのが現実の姿である。

私の研究室でも、初期には一般研究A、試験研究、特定研究などによりスペクトログラフをはじめ、種々の光生物学に必要な装置を開発したが、それらは高額とは言え一度得れば、多くの人たちが長い期間利用して研究が出来た。ところが最近の分子生物学や細胞生物学の手法の問題点は、特別な施設や装置が必要なだけでなく、日常的に湯水のように消費する試薬やトレーサーが極めて高価なところにもある。つまり金がなければ、勝負にならない面を持つ世界なのである。さりとてむやみに金蔓を探せば魂を売りかねないことにもなり、大学の在り方について問われることになろう。

ちなみに、第1表は、私が担当した期間に植物学第3講座が教室から最終的に配分された「自由に研究に使えた校費」の実額を示している。総理府の物価指数で補正した値を見て戴ければ、一度改善の兆しが現れたが、再び事態は悪化の傾向を辿っていることが明かに判かる。また、御存じのとおり理学部2号館は、数年前の大改修後、各研究室にメーターをつけて、電気料金は受益者負担とした。第2表は、私の講座が支払った最近数年間の電気料金である。第1表と第2表に示された額の和が、年々この講座に渡された校費の総額になる。現実には当講座に属する十数名が研究を進めるために、この校費の数倍を要したが、科学研究費など他の財源によりそれを充当して来た。

第1表 植物学第三講座に対する校費配分類

年度	配分額(円)	物価指数 (%) *	昭和43年を100 とした比率(%)
43	750,067	32.6	100
44	880,000	34.4	111.2
45	1,380,000	36.9	162.5
46	1,245,000	39.3	137.7
47	2,020,000	41.2	213.1
48	2,400,000	46.0	226.8
49	2,745,000	56.6	210.8
50	2,882,500	63.3	197.9
51	2,542,500	69.3	159.5
52	2,882,109	74.9	167.2
53	2,882,741	78.1	160.4
54	2,274,483	81.0	122.0
55	1,974,428	87.3	98.3
56	2,281,762	91.5	108.4
57	3,132,868	94.1	144.7
58	2,827,667	95.8	128.3
59	2,178,190	98.0	96.6
60	1,686,600	100	73.3
61	2,346,547	100.6	101.4

* 昭和60年を100とした物価指数(総理府、企画庁調べ)。

いわゆる University はフランスには僅か8, 西独には二十数校, イギリスでも44しかないと聞く。わが国には国立大学だけでも95校(その内大学院を有する物が91)あり, 私立大学はこの約三倍もあることを思えば, パイの大きさは限られているので余り贅沢は言えないかも知れない。そこで他の省庁の研究所と理学部の予算を比較したのが第

第2表 植物学第三講座の電気料金

年 度	電 気 料 金
57	2,101,349
58	2,361,040
59	2,119,600
60	2,004,328
61	1,574,190

3表である。この数字から何をお考えになりますか。大学紛争の頃には教育と研究の分離が流行して, その後創設された文部省の直轄研には大学院は設置されなかった。しかし自然科学では高等教育と先端的研究は表裏一体であるから, 最近に至って直轄研も大学からの委託院生に加えて自らの大学院を持つようとしている。その様な新しい事態に係わらず, 理学部に直轄研なみの施設や経費を与えられない場合, 理学部の将来はどのようなことであろうか。

昔は顕微鏡1つ抱えて, 小石川植物園の大銀杏に登り, 精子を初めて発見して, 後世に名を残した先輩が当教室におられた。我々は後輩諸君に, 再び素手に近い状況で勝負を強いなければならないのであろうか。心苦しいことである。

第3表 昭和61年度当初予算比較

関係省庁	部 局	計(億円)	人件費(億円)	〔人数〕	運営・設備費 (億円)	〔講座・部門数〕
文 部 省	東 京 大 学 理 学 部	59.6	33.7	543	25.9	90
	岡崎国立共同 研 究 機 構	49.6	15.8	331	33	43
	高エネルギー 研 究 所	322.9	24.6	577	298.3	80
農林水産省	農業生物資源 研 究 所	24	12	236	12	42
環 境 庁	公害研究所	42.6	12.6	250	30	40
科学技術庁	理化学研究所	148.5	53.0	612	95.5	49

古谷先生の御退官によせて

飯野 徹 雄 (植物学教室)

私達植物学教室では、内外の第一線の研究者をお招きし、幅広い分野における先端的な研究にじかに触れる機会を学生達に与えるための科目として、「生物科学セミナー」を実施しています。そして、御退官の先生方にはそのコマを当てて最終講義をお願いすることにしています。本年3月に古谷先生が停年で御退官されるに当たり、この「生物科学セミナー」をお願い致しましたところ「これからしたいこと——光情報による生体調節機構の解明」という演題を寄せられました。御停年に当たっても眼を将来の研究活動に向けたこの演題にこそ、古谷先生の真骨頂が現われているように思われます。常に先見的発想で、力のある限り前進する古谷先生にとっては、東大における停年は終結ではなく、新しい前進のための一区切りすぎないように思われます。

古谷先生は昭和24年3月に東京大学理学部植物学科を卒業された後、同大学院に進学され、故前川文夫教授のもとで昭和35年に理学博士の学位を受けられましたが、その途次より米国エール大学大学院に留学しPh. D.を受けられ、昭和37年秋からはハーバード大学のフェロウ、そして昭和38年秋からはブルークヘブン国立研究所所員というように、外国の大学・研究所を遍歴され、植物発生生理学者としての地歩を確立されると共に、国際人としてのセンスを我が物にされました。そして昭和40年に名古屋大学理学部助教授として7年ぶりに帰国され、昭和43年には東京大学理学部助教授として古巣に戻られ、翌年以降同教授として、植物学第三講座を担当され、この度の御停年を迎えるに至ったものです。このような遍歴の道程、古谷先生の言葉を借りれば「流浪の研究者」の御経歴が、この度の御退官をも、「研究のもう一つ

の一里塚」として位置付けておられるように思われます。

古谷先生はこの遍歴の期間を通じて、学問分野においても植物の形態学、生理学、発生学にわたる非常に広い視野を身につけられて、それを後進の育成に活かされ、また研究面では特に光環境情報による植物の形態形成や生体機能の調節機構をフィトクローム分子の動態に着目して解明し、国際的に我が国が誇るべき業績として高い評価を受けておられます。先に紹介した演題にみられますように、この研究課題は本学御退官後も畢生のお仕事として続けられてゆくことでしょう。

常に新しい道標を自ら作りながら進まずにはいられないという古谷先生の意欲は、単に研究面ばかりでなく、研究・教育行政、学会活動において躍如たるものがありました。「古谷先生が動くとか何かが始まる」という評価は実に当を得ているように思われます。学園紛争終期に本学に着任され紛争後の植物学教室の体制確立を主導されたのは彼でしたし、特に情熱を注いでおられた理学部附属植物園の発展のために、園長として運営委員会を発足させ、将来計画案を設定し、さらに小石川植物園後援会を発足させたのも古谷先生でした。また、学外においても岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所の創設責任者を務められたり、日本発生生物学会、日本光生物学協会の創立に尽力されるなど、生物学会において「事起る所に古谷あり」といわれる程の目覚ましい御活躍でした。そして現在は国際植物学会議の日本招致準備委員会委員長として、持ち前の主導力を発揮しておられます。また御退官後も息つく間もなく、国際的研究プロジェクト計画のリーダーとして、御活躍を続けられると伺っております。

古谷先生のこうした御経歴をたどってみますと古谷先生にとってはこの度の停年御退官も些細なことであるかも知れません。しかしながら先生をお送りする私達にとっては、矢張り卓越した先輩

を身近から失うことに対して惜別の念を禁じ得ません。東大在職中の教育研究の幅広い面における御尽力に感謝すると共に、今後の国際的研究活動におけるますますの御発展を期待致します。

老いのくりと

小柴昌俊(物理学教室)

停年退官するに当って何か書けとの事ですが、原稿書きは私の最も不得手とする事で、何とか逃げ切ろうと努めたのにこの有様になりました。しかし23年半にわたって多額の血税を使った夢を追い続けさせて下さった理学部の先生、先輩、同輩の皆さん、特に学生諸君に御礼を申し述べないで去るわけにもいきませんから、ここに改めて心からの御礼を申し上げます。

先日の最終講議の時にも物理の夢を追い続ける事がどんなに楽しかったかを御話したつもりですが、その折、時間が足りなくて、まだ追い切れない夢の幾つかを御話し出来ませんでした。私はもともと「素粒子と宇宙」にひかれていますのですが、それ以外にも追いかけてみたい夢が幾つかありました。しかし話を物理の夢に限りましょう。停年に当りセルンでのLEP-OPALの仕事は名実共に折戸助教授の責任で、又神岡の地下実験(陽子崩壊と太陽ニュートリノ)は戸塚助教授の責任で遂行される事になって居り、この二つのプロジェクトに関しては何の心配もありません。素粒子物理国際センターのセンター長には有馬教授の着任が決まりましたし、そうなると又何か夢を追いたくなるのが因果な性分で、昨年暮頃から折戸さん達とLENA(Lake Experiment on Neutrino Astronomy)を何とか実施しようじゃないかと相談しています。これは神岡での大量の水を用いたチェレンコフ検出器の経験を基にして、 10^4 m²以上の面積、 5×10^5 m³以上の容積の大量の水を

用いて、一つには 10^{14} eV以上のガンマ線天文学と、地球を通り抜けて来るニュートリノによって作られた上向き μ 粒子による高エネルギーニュートリノ天文学の世界初演をねらったものです。当初湖を使う事を考えたので、南米のティティカカ湖、アメリカのタホー湖、中国のティベット高原の湖などからはじまり、田沢湖、芦の湖、西湖等々は現地にも視察にも行きました。しかし、自然湖を使うとすると、水流によって受ける力、嵐の際の処置、氷結の問題等、解決可能ではあってもその為巨額の費用を別途必要とする問題が幾つかあります。そこで昨年11月末に都知事当てに手紙を書いて知人を通じて手交してもらいました。即ち、バーゼルの化学工場の事故でライン河がひどい状態になった例もある事だし、東京都民の非常事態の飲料水として50万トン位の貯水池を掘る気はありませんか? そうすれば、その水を普通の飲料水よりはずっとキレイな状態で、10年でも20年でも私共で責任をもって保存しますと、又音楽や美術では都の事業の実績が多々ありますが、これをやれば都の基礎科学に於ける最初の事業として世界最初のニュートリノ天文台が創れる事になります。といった内容の手紙です。丁度その直後大島の憤火が始まって、テレビでは毎日都知事のナッパ服を見せているので、あの手紙は屑かご行きだったのかと思っていたら、都の水道局の部長さんが部下2名をつれて大学にあらわれ、知事から検討を命じられましたので、もっと詳しい御

話しを伺いたいとの事です。一時間程話しをして彼等は検討すると帰って行きましたが、未だに何とも言って来ないのを見ると結局不発に終りそうです。一方最近折戸グループの若い人が大谷石の採石場跡地に、うまく貯水池を作れる可能性があるかも知れないと聞いて来て、この可能性も追いかけています。又UCLAのD.Cline 教授が昨秋ここに来たとき、この計画を聞いて、タホー湖で是非一緒にやろうと言って来ていますので、国内であらゆる可能性がつぶれてしまったらカリフォルニアで実施という事も考えねばなりません、私共としては何とか日本でやりたいと努力しています。

もう一つLA BOULE というのを考えています。これはフランス語で球という語ですが、定冠詞のLA にLiquid Argon の意味を持たせてあります。これはつい最近新聞に記事が出たアメリカの超巨大加速器SSCで行う実験用に考えたものです。昭和60年の11月急にアメリカから電話があって、SSCの実験を議論する委員会に出席してくれとの事です。あまり急な事なので、第一回は見送り第2回の12月の委員会に出席しましたら、議論は

2億5,000万ドルかける汎用検出器が幾つか対象になってます。そこで私は自由な発想こそが、素粒子物理実験の忘れてならない事で、大学の小グループが夫々のアイデアを磨いて、参加し易い様に(1)実験用全予算の10%を始めから取りのけておいて、諸大学からのミニ・プロポーザルに当てよ。(2)相互衝突場所のうち2ヶ所は、こういったミニ実験の為にあけておけ。と主張して、それが委員会の最終報告にもり込まれました。その折委員長から、一例を考えて欲しいといわれて、上記価格の25分の1を頭に置き、20人位のチームにやれる様なものとして考えたものです。物は簡単で半径11mの球を作り、その中に液体アルゴンをつめて、その中でセレンコフ光とシンチレーション光を別々に測定して、反応二次粒子の分別、エネルギー測定をやるというものです。詳しい事は先週阪大で行われたシムボジウムのプロシーディングにのせますが、大学こそは学問研究に於ける自由な発想を育て得る唯一の場所だという事を、特に強く感じています。同じ事を何とかして文部省の御役人に感じてもらいたいと願っています。皆さんさようなら。有難う。

小柴先生の御退官によせて

折戸周治(物理学教室)

小柴昌俊先生は本年3月定年退官されることになりました。

先生が本郷にいらしてからもう24年にもなります。先生がまだスリムな長身でフォルクスワーゲンを乗り回していらした頃でありまして、この間の時の流れを想いますと誠に感慨深いものがございます。

小柴先生は昭和26年東京大学理学部物理学科を御卒業後、東京大学及びロチェスター大学大学院を経て学位を取得され、ロチェスター大学、シカ

ゴ大学研究員、東京大学原子核研究所助教授を経て38年に本学部に着任されました。先生は宇宙線、素粒子の分野にわたって先駆的、独創的な研究を行ってこられました。なかでも宇宙線の超新星起源の指摘、原子核乾板による宇宙線相互作用の研究などが有名であります。

また素粒子物理の分野においては49年当時に電子・陽電子衝突実験の将来性を鋭く見抜かれ、理学部付属高エネルギー物理学実験施設の設定に尽力され、これによって国際協同実験DASPによ

る新粒子Pcの発見及びタウレプトンの確立、更にJADE実験によるグルーオンの発見、統一ゲージ理論の検証等の成果を可能にされました。この業績によって60年にドイツ国大功労十字賞を授与されました。

近年は素粒子物理国際センター長としてOPAL実験を発足させると共に、陽子崩壊、更にはニュートリノ天文学等の先鋭的な研究を行われつつあります。

また先生は多くの研究者の育成に貢献されまし

た。先生の教育は知識や技術の伝授というよりは先生に接して一緒にやっているうちに、先生の企画力、行動力、気迫、といったものから、知らず知らずのうちに研究に必要なものを会得して行くといった、いにしへの剣術修業の趣が強かったように思われます。

先生の大胆な発想がますます冴えわたりつつある今、理学部を退官されるのはまことに惜しいことです。今後の一層のご活躍をお祈りし、究極の旧人類、小柴先生を送る言葉といたします。

“ 躍 ”

向山光昭(化学教室)

思いもよらない早さで十四年のときが過ぎて、大変お世話になったここ本郷の理学部ともいよいよお別れの日が迫って来た。あの懐しい、この上なくクラシックな研究室で仕事にとりかかって、そして今は欧米からポストドクが来ても抵抗のない大変整ったラボで働いている。まわりの事情が十年経ってととのい、大岡山からここへ移り住んでから先生方、若い人達と楽しく過ごしたこの時期は誠に貴重な研究生活の一里塚であり、改めてお世話になった皆様に心から感謝したい。

十年、十五年という一区切りを振り返ってみるとその間の科学の進歩は誠に目覚ましいものがあり、その例に漏れず日本の化学も格段の進歩を遂げた。しかし、2という種を6という形にしたり、5の知識を9に仕上げることは誠にうまく出来るが、まだ何か足りないと言われる。文字通り世界のトップレベルに君臨するために今求められているのは、0から1を生み出す、すなわち新しい種を生み出すことである。

人の気が付かないことを拾い出して、それが大事なルールであり、役に立つものであることを明らかにする、その為に求められる基本的な姿勢は

人の真似をしないということである。答が出てから批判をしたり、説明したりすることは誰でもできる。そうではなくて、コロンブスの卵の謂のように初めて卵を立てることに意味があるわけで、若い人がどんどん新しい種を見つけ出すことが日本の化学のレベルアップにつながっていくのである。個人にとって本当の研究とは自分が新しく種から育てて、川の底に根を張っている、いつ行っても流されないで残っている仕事である。流行を追った研究は一見華やかであるが浮き草のように流れ去ってしまう。あえて新しいものへの挑戦を唱える所以である。

化学の研究では思いがけないヒントが実験を通して見つけ出されることが多い。このような意外性に富んでいることを心にとめて、自分が考えたことはまずやってみる、やってみて、また次の新しい考えを探していくというのが研究の基本である。幾らいいことを考えても、やらなければ空理空論に終わってしまうのでいつも実践先行、実践先行と唱えながら走り続けてきた。へこたれないでやっているうちに、きっと明るい光が見えてくるものであり、周りには無尽蔵に宝の山が残されて

いる。

理学部の大きなふところの中で、それぞれの分野の方々が大きな可能性を求めて飛躍、発展され

ることを祈り、また化学の大きな樹もその一環として活き活きと育っていくことを期待して筆を擱く。

向山光昭先生の御退官によせて

奈良坂 紘 一(化学教室)

向山先生は、昭和48年、東京工業大学から本学理学部化学教室に着任、有機化学第二講座を担当されましたが、本年三月をもって停年退官されることになりました。

有機合成化学の分野における先生の世界的な御活躍ぶりは、日本化学会学会賞、日本学士院賞・恩賜賞をはじめ、ミュンヘン工科大学自然科学名誉博士号、コペルニクスメダルなど、数々の榮譽を受けられたことで、周知のことと存じます。先生の研究のモットーは、“独創的であれ”の一言であり、先生御自身の研究に対する情熱には、いつも頭の下がる思いが致します。研究者としての向山先生については、新聞・雑誌等で多く紹介されてきましたので、ここでは教育者としての先生の一面を述べさせて頂きます。研究の独創性もさることながら、向山先生の講義も誰にも真似できない迫力に富んだものと知れ渡っております。二十数年も前になりますが、小生も先生の講義を初めて受けた時、大学の研究者というものはこういうものかと、目を覚まされる思いがいたしたものです。この度向山研究室の同窓会誌を作成するにあたり、4年生が寄稿してくれた原稿の一部を、先生の講義の雰囲気良く書かれていますので、引用させていただきます。

『向山先生との出会いは、江戸末期の庶民が、浦賀沖に姿を現した黒船によって受けた衝撃と同様なものを僕にあたえた。天下太平の教養時代をのほほんと過ごしていた教養四学期、先生はその姿を現した。……授業中に内職をしていた者や遅

れて入室して来た者に対し、チョークと叱責の雨を降らせ追い出すという暴挙まで引き起こしたのだ。……学生は彼の要求を受入れ、定刻どおりに授業に出、内職、むだ話もせず、話を聞いたのだ。聞いていると話はとても新鮮で、研究の息吹が伝わってくる。この新鮮さは、鎖国の中、本でしか諸外国の知識を得られなかった人々が、開国により生の知識を得る事になって感じた新鮮さと同じだったのではないだろうか……。』

このように先生の講義は厳しいが、とにかくその端々に研究の面白さが溢れていると、定評があります。とくに御自身の研究を例に、“実験の中からの、思いもかけなかった発見”について熱っぽく語られる時には、化学の研究の持つ意外性に学生たちは引きずり込まれる様です。先生の講義を機に、研究への意欲を湧かされた若者も、非常に多いと思われます。

先生は、本学御退官後も、新しい研究の場で仕事をお続けになるとのことでございます。どうぞ御身体を大切に、これからも研究・教育にと益々の御活躍を、心からお祈り申し上げます。

代 谷 次 夫 (動物学教室)

クロード・ベルナルの「実験医学序説」に魅せられて生物学を選び、植物学科に入学した昭和22年は戦後の窮乏^{きゆうぼう}した時であったが、今振り返ると空腹感より講義の印象が強いのは智識に飢えていたのだろう。まくしたてるような植物生理化学の服部静夫、論理的な光合成の田宮博、動物の生殖で真に迫る岡田要、歯切れのよい内分泌の竹脇潔らの諸先生の熱気は今でも肌身に残っている。第2年目は専ら他教室の講義に出掛けた。植物より他所^{よそ}を聞けと逆説的に広く知識を求めよと説教するこわい先輩が植物教室には多^{ひよう}かった。飄然とした矢野健太郎、緻密そのものの小谷正雄、軽妙に語る水島三一郎らの先生の講義は活字からは得られぬ新鮮さが溢れていた。理学部らしい教育を受けていたのだ。最終年の卒論のテーマ「松の糖」をどう進めるか思案している時5月祭が始まり、薬学の展示でみたペーパークロマトグラムがその後の私の主要な研究手法となった。糖の分離に使用したいと申し出たら、好奇心旺盛な服部先生は即座に同意されてホットした。この手法を目玉として私は卒論をまとめることができた。

昭和25年学部を終えても就職の道も、気もなく、当然のように大学院に進んだのは“理学”の教育によったのであろうか。テーマを同うと院生は研究者の卵だから自らにテーマを課して開拓せよとの先生の答だ。そこで卒論の手法に徹して新たなやり方を考案し、松の発芽時の糖代謝が脂肪種子に普遍的な現象かを調べることにした。その頃立大化学の友人から $^{14}\text{C O}_2$ を光合成で摂取させた桑の葉の糖を調べる依頼があった。米国から理研関係者に恵与されたR Iによるものである。当時BerkeleyのCalvinらはクロレラに $^{14}\text{CO}_2$ を投与し、ペーパーオートラジオグラムで同化中間産

物を経時的に調べ炭酸同化の過程を明らかにしていたので、世界の注目する実験が急に身近かに感ぜられた。桑の試料で糖のペーパーオートラジオグラムを作ってみたいと話すと服部先生は再び好奇心を燃やし、化学の木村健二郎先生や医学部放射線科の中泉先生を紹介され、病院地下のR I室(ビキニ研)の暗室で杉村隆氏とX線フィルムを使って貴重な経験をした。

助手になって5年目の昭和34年から3年間、カナダのQueens大学に留学し、Krothov教授の下で $^{14}\text{CO}_2$ を用いて松の同化産物とその根への転流を研究することになった。林業国カナダの特別研究なので、日本では無駄なく細心に使用していた ^{14}C を、ここでは誰もが放射線影響の出ぬ範囲内で惜しみなく使用して成果をあげていた。この時のR I使用の経験がその後の私の方向を変えたと思う。

昭和37年帰国して動、植2教室が協力する新設の放射線生物学講座の助教授になった私は、放射線の影響には素人で何から始めるか迷った。この講座は動物学教室が預かる大学院講座なので、私は動物学教室員で植物学課程の大学院担当教官であった。これも私を戸惑わせた。動物教室と植物教室は雰囲気はずい分違うのだ。藤井隆、秋田康一先生も困惑されたことだろう。今でこそ私は動物学教室の廊下を大きな顔で歩いているが、当時は借り猫の心境であった。私をとりまく人も物も一変したが、やることが次々にあって感傷にふける暇はなかった。原子力の教育・研究体制を論ずる全学委員会が毎月開かれ、幹事として議事録をまとめるため関係学部長や主要な発言者の意見を聞いて廻った。講座新設費の半分を投入するR I実験室の設営を始める。やがて予算のつく生物用

照射装置の概念設計には今後行われるであろう未知の実験も考慮されねばならなかった。当時の数倍に拡張された現在の2号館RI施設や原子力センターの生物用照射装置室に一步足を踏み入れると当時のことが彷彿として浮んでくる。

現在私はウニ胚を材料として初期発生の紫外線生物学的解析を始めて15年になる。松からウニへ糖代謝から初期発生への変遷の裏には以上のような事情があった。与えられた新たな環境に適合した結果だが、それはその環境で新たに会った人と物に影響をうけ、触発された結果で自発的な変化でもある。染色体異常を調べたのは江上信雄先生の示唆によっている。紫外線効果の光回復現象の作用スペクトルは阪大近藤宗平研で得られた。

ウニ胚光回復酵素の作用スペクトルの実験はBrookhavenのSetlow, Sutherland博士との共同研究であった。

現学部在籍して40年、人や物との出会いは必然でもあり偶然でもあった。必然と思はれたことも偶然の契機に発していたり、偶然に起ったその状況は必然と考えざるを得ないこともあった。接する人や物から常に貧欲に何でも吸収しようとした学生、院生時代が懐しい。今でもあの頃と気分は同じである。40年経ったことが信じられない。不愉快なこともあったが、あつという間に経って40年の経過を感じないのは、結局居心地が良かったからだろう。(62.2.14.)

代谷教授の御退官にあたって

嶋田 拓(動物学教室)

代谷先生は本学理学部植物学教室の御出身で、生物学科に放射線生物学講座ができると共にその助教授に就任され、同講座の動物学教室への移管にともなって動物学教室に移られ、その後、寺山宏名誉教授御退官の後を受けて、発牛生理学講座担当教授に昇任されました。

代谷先生とは先生が放射線生物学講座に移られて以来お付き合いいただいており、RI室の利用やRI廃棄物の処理などで大変お世話になりましたが、特に、発牛生理学講座に移られてからは先生の下で親しくご指導いただきました。

先生のご専門は放射線生物学で、ウニを材料として、UV照射によってウニ胚DNAに生じた損傷による異常発生の光回復過程を研究され、興味深い成果をあげられました。また、先生は、トリチウム被爆の動物体に対する影響にも大きな関心を持たれ、本学原子力センターに一室を借りて、その方面の研究も活発に行っておられます。たま

には、若い人たちと一緒に冬のウニの冬期夜間採集に出撃され、ご自分でも「植物学教室出身ではあるがどういふわけか動物学との付き合いの方が長くなってしまった」と笑っておられます。

先生のお人柄によって、研究室の雰囲気は賑やかで、スタッフも院生ものびのびと研究に励むことができました。昨夏、海外出張中に不慮の事故に遭われて負傷され、現在入院闘病中であられますが、先生が一日も早く社会復帰されることをお祈りいたします。三月で御定年を迎えられますが、お元気になられましたら御退官後も研究室をお訪ね下さり御指導下さいますようお願い申し上げます。

東大での一生

市川 健雄 (地質学教室)

通称市川少年、boy と呼ばれていた時代、市川君と甲高い声で呼ばれていた時代も、速いものでついでこの間の様でしたが、あと1ヶ月ばかりで、定年退職することになりました。

戦争末期から東大に勤務されている方々も大部少なくなられたと思います。戦後の苦しい生活の時期を自分も含めて、大変辛抱強くと申しましょうか、いままで我慢してこれでよかったと、今では思います。

在勤中のいろいろなことが思い出されますが、戦争中しばらくして東京も空襲を受けるようになり、教室も疎開することになりました。講座によって、山形県と新潟県に疎開しました。私は山形県の大石田町という、冬には二階から出入するような大雪が降るところです。毎日が標本、図書の梱包等疎開の荷物の荷造りでした。そのうちには梱包もうまくなり、藁縄の結び方などもおぼえる程に上達しました。今では荷造りは荒縄ではなくなりました。大石田では小学校(国民学校)の一部をかり、大石田分室として標本・図書などをとほぐして、出発しました。我々は近くの寺に宿泊し、蛍雪寮と名付けて、毎日交代で食事を作りました。ここでも、食糧難で、米屋から糖を買ってきて、雑炊にしたこともありました。そのうち農業試場の桑畑をかりて、桑の木の下に大根を作り、秋に最上川の川原で洗ったのですが、とても冷たくて、生きている気はしませんでした。冬のために大きな樽に大根をつけて、保存食として毎日食べました。そのうち空襲で大石田でも機銃掃射を受けて怪我をした人もいました。

そのうち終戦となりますが、東京との交通のうちで、汽車が板谷峠を通るとき、スイッチバックにもかかわらず、峠をしばしば登り切らずにもど

ることがあり、乗客はびっくり、大さわぎしたこともありました。燃料が悪く石炭ではなく、亜炭だそうでした。

食糧難の時代でもあり、東京も大変でした。二号館の裏の青木堂は食堂となり、昼になると長い行列ができ、大きな釜で雑炊を煮ており、今日は何ばい食べたとか、今日は箸が立ったとかいって喜こんでいたこともありました。

その後の移り変わりも激しく、今の関電工のところにも本郷区役所がありました。郵便局も消防署のところから、向ヶ丘の駒込中学の方へ変り、遠くなったこと、東大工学部の方と変わったことを思い出します。

戦争中は出張に行くのも一苦勞で、米をもって旅行し、牡鹿半島大島などでは、スパイではないかと思われていたこともあります。

やはり思い出されることは、戦中戦後の印象が強かったのでしょうか。この時代のことの方が多く思い出されます。しかし、標本や図書も無事であったことが、一生を通じての大きな慰さめになると思います。一生懸命につっぱしってることができたのは、偏えに諸先生、諸先輩のおかげと感謝し、余力を残さず、一生を東大で終えることができたのはまことに幸せで、誇りと思います。長い間ありがとうございました。

市川健雄さんと化石標本

速水 格 (地質学教室)

市川健雄助手は、40年以上におよぶ地質学教室での勤務を終えられ、この春に停年退職される。16歳の時に備人として教室に採用されたとのことであるから、理学部の全教官・職員の中で最古参の一人であろう。戦中・戦後の混乱期から現在まで、教務員・文部技官・文部教官と身分こそ変わったが、終始地史学・構造地質学・古生物学関係の講座の底辺を支え、地質学教室の発展に尽して来られた。まだまだ働き盛りなのに、停年制が何ともうらめしい。

市川さんの功績は多岐にわたるが、後世に残るものとしては、何ととっても、小林貞一名誉教授の在任時以来長く続けて来た化石標本の整理作業が重要であろう。花井哲郎名誉教授が古生物学講座を担当されてからは、毎週3日をこの作業にあて、今日まで当教室の関係者が研究を済ませた化石標本を一手に整理・保全して来られた。このほか、木村敏雄名誉教授のもとで始められた構造地質学に関する文献情報の収集・整理にも尽力された。

古生物学は化石標本なくしては存在しえない。その研究目的が過去の生命現象の解明であろうと地質学への応用であろうと、標本への依存度は現生生物学に比べてもきわめて大きいと言えよう。特に研究に直接用いられた標本を適切に整理して保全することは、研究の再現性とそれに対する反論の可能性を保証するものであり、古生物学がサイエンスであるための必要条件となるのである。このことは各研究者が十分に認識している筈なのに、日本の研究機関での標本保全は一般にきわめてお粗末と言うほかはない。当教室でも戦中・戦後の混乱があって、市川さんが整理を行うまでは決して好ましい状況ではなかった。

一般に研究者は1つの研究が完了すると、すぐに次の研究に移る。自分の研究標本を大まかに整理するのがやっとなで、とても他人の残したホコリをかぶった標本を整理してあげるほどの余裕は持ちあわせていない。中には、せっかく整理してある標本を勝手に持ち出して散逸させる不届き者もいる。市川さんのようなキュレーティングを専門とする人がいない機関では、たちまち混乱と紛失が起る。

本学創立以来、当教室の関係者はおよそ600篇の論文に15,000点以上の化石・現生標本を記述した。これらは総合研究資料館の地史古生物部門のタイプ標本室に論文別に配列して納めるようになった。市川さんは、これらを1つずつ論文の図・記載・計測値と照合しながら登録・整理を進めた。私も資料館在任中に10年ほど同室し、多少のお手伝いもしたが、実に忍耐を要する仕事である。市川さんには、標本の欠損の具合とか、ちょっとしたキズが照合の手がかりとなるようで、標本と図版の写真がピッタリ一致した時に無上の喜びを感じるといふ。仕事を愛し、それに徹する人だけが知る喜びであろう。その整理の成果は、合計900ページにおよぶ2冊の標本目録(総合研究資料館標本資料報告、第2号(1978)、第9号(1983))となって刊行された。市川さんが助手に昇進され、学芸員の資格をとられたのも、この業績によるところが大きいと聞いている。

市川さんの行った研究論文別の整理方式は、保全のための労力とスペースが最小限で済み、閲覧希望の標本を直ちにとり出すことができるので、学内外の研究者にきわめて好評である。年間十数人以上の古生物研究者が標本の閲覧に訪れるが、異口同音にこの方式による完璧な整理に感嘆して

帰っていく。おかげで私達も鼻が高い。外国の研究者にも、この2冊の標本目録は“イエローブック”と呼ばれ（表紙が黄色いので）、たいへん親しまれている。おそらく、今後内外でこの方式を参考にして標本保全を行う機関が増えてくるであろう。

このように市川さんは、世界的に見ても模範となるような標本整理を通じて、古生物学の発展に一般の研究者が到底及ばない大きな貢献をされた。退官までの残り少ない日々を3冊目の“イエロー

ブック”の原稿の推敲に打ちこんでおられる姿を見るにつけ、賞讃と感謝の気持ちで一杯である。同時に市川さんの長年にわたる献身的な尽力をひき継いでいくべく、これからの標本保全対策（いまわしい定員削減のために困難に直面している）を早急に立てる必要にも迫られている。市川さんには、ますます壮健で新たな人生を歩まれると共に、これからも標本保全について適切なアドバイスをいただくようお願いしたい。

長田多美子さんに送る（まずは、御安心を!?)

永田 豊（地球物理学教室）

ようやく水槽実験室が整備できたのにもなつて、この1月より7号館地下に移転しました。今まで3号館の2階で、狭い部屋で水をこぼさないように気を使って実験をしてきた私や、私が直接指導している大学院学生にとって実に嬉しいことではありますが、おやめになる直前に引越という重労働を余儀なくされた長田さんには、まことに迷惑な話ではあったらと思います。しかし引越作業の期間中も研究活動やその他の仕事をほとんどストップさせることなくすませられたのは、長田さんの有能さと責任感に負うところが大きく、またこの間嫌な顔1つされなかった（見せなかった？）のは長田さんの人徳と云うべきでしょう。しかし、『新居』に移ったとたん下手な『贈る言葉』などを書くとき、今度は本当に嫌な顔をされるのではないかと心配です。

長田さんは最初、私の先々代の日高孝次先生の研究を助けられていました。先生は電子計算機出現の直前に、数値実験の草分け的な大仕事をされた方ですので、研究助手たる者は朝から晩まで手廻しのタイガー計算機を廻すことになり、これは大変だったらと思います。日高先生と云う方は

その威厳のある顔に似合わず仲々ユーモアのあった方で、何かの研究会で『先生、その結果は私には理解できません。計算違いじゃないのですか？』と随分失礼な質問をした人に、『そうですかな。これは長田さんが計算したんですがな。』と喋ってプイッと横を向いてしまわれました。質問者が納得したような顔で引退したのは一種の『呼吸』と云うものかもしれませんが、長田さんがいかに計算のエキスパートであったかを物語る逸話ではありません。もっとも、タイガー計算機のエキスパートがいかなるものであるかは、修士論文を書くのに13×13の複素行列の逆行列を手で解かなければならなかった私位の年配者しか解らないかも知れません。

日高先生が海洋研究所に移られたあと、しばらく今筑波大学におられる高野健三先生と仕事をしておられたと思います。その後、講師に昇格したのを機会に私が長田さんと一緒に仕事する機会を得て、今日にいたっているわけです。最初の頃、頼んだ仕事が私の予想よりずっと速くできあがるので、無尽蔵に計算の種を思いつかれた日高先生のような才能の無い私はすぐ種切れになり、よく

『何もすることが無いのですか』と寂しそうな顔をされたのを覚えています。そこで思いついたのが、面倒なので誰も手をつけない観測資料の整理の仕事です。今でこそかなりの観測記録はオンラインでミニコンにぶち込んでしまうようになりましたが、当時海の水温鉛直分布をガラスのスライドにアナログ的に記録するMBTという器械があり、そこに面白い現象が一杯記録されているのですが、普通は標準層の値を読み取った後は倉庫行きになります。これを気象庁や水路部の倉庫から掘り起してきて、水温の逆転層の特性を統計的に調べたのです。この仕事に5~6年はかかったと思いますが、これはその後の私の主要研究テーマの1つである海洋微細構造の研究の端緒となったものです。実はほとんど忘れてしまっていたのですが、今回の引越に際して読み取りカードがミカン箱に4杯以上も出てきて、『ひゃあ、やっかいな仕事をやったものだ』とあらためて自分ながら感心した次第です。

もちろんこのようなデータの読取・整理・統計

だけでなく、ちょっとした計算、電子計算機へのインプット、結果の作図・製図、英文タイプから日本語ワープロ、そうしていわゆる秘書的工作一般と、長田さんの仕事は時とともに広がり、私の仕事は長田さん無しで成立たないという形になってしまったわけです。少々しゃくにさわるのですが、他人の目からもそう見えるらしく、『おい、4月からどうするんだ』と心配してくれる人が随分といます。『なに、俺だって事務能力もあり、結構器用なんだぜ』と答えることにしていますが、『しかし、お前の悪筆が読める人は他にいないから、お前だけでなくまわりが非常に困るだろう』と云われると返す言葉に困ります。と云うわけでこのところ一生懸命ワープロを練習中で、この文章もワープロで書いている次第です。まあこのぐらいできるのですから、少なくとも悪筆の問題は解決した。先のことは何とかなるだろう、ケセラ・セラ、『まずは御安心を』というのが現在の心境ですが、さてどうなりますことやら。

丸山恵子さんを送り、大学を考える

熊 沢 峰 夫 (地球物理学教室)

丸山さんが理学部地球物理学教室に勤務を始めたのは、戦後の混乱がまだ収まらない昭和23年11月であった。最初の仕事は、海洋物理学講座での数値計算だったと聞いている。当時の講座担当は“日高パーティ”で有名な（そのころは教室内のささやかなダンスパーティで世間には全く知られていなかった筈である）日高孝次教授である。コンピュータのない時代の数値計算は大変な仕事であって若手の方々には想像もできまい。計算手順を考え、罫紙に適切ななすをデザインする。私は学生の頃、日高先生の数値計算法という本を勉強した事がある。三角関数や指数関数は函数表という

数値テーブルを引き、加減算はソロバン、掛算と割算はタイガーの手動計算機を回して、チンチンジャリジャリチンジャリと音を立てながら用意したますをうめて行く。これを来る日も来る日も繰り返すのである。計算を間違いなくしかも早くやるには相当な技能と技術が必要で、上達するには修練と集中度がいる。丸山さんは英文タイプや製図も相当な腕だった。それから40年近い歴史が流れた。

定年で退職する丸山さんへの私の送辞は二つある。

「短い間でしたが、一緒に働けたことを大変幸い

だったと思います。仕事を誠実に助けて頂いて本当に有難うございました。どうか第二の人生をお楽しみ下さい。」

「長い間、不当な扱いをして申し訳ありませんでした。他の教官、職員に代わってお詫びします。将来こういうことの起らないよう、大学における技術職員のシステムを必ず改善します。」

私が丸山さんに始めてあったのは、3年前である。4年前、外から赴任してきた私に、ある教授がこう言った。「技術職員の諸条件も改善して貰いたい。ただし…には決して関わってはならぬ。」このタブーの中に丸山技官の名前もあった。最初の一年は、気位が高く妖気ただようここに自分自身が適応するのに苦勞し、他の講座のことに関わる時間もなく、その立場にも無かった。次の年、教室主任なるものをやることになったので、禁を犯して窓際の丸山さんに会った。少々話をしてみてたちまち頭が混乱してしまっただけである。とにかくワープロを覚えてもらって教室主任の仕事を手伝って貰った。当時は数少ないOA機器に不慣れだったこともないわけではないが、たちまち事件が起こった。何人かの教官と職員から、丸山さんを働かせるな、という強硬な要求が出てきたのだ。丸山さんの働きぶりや資質をみて、混乱していた私の頭は一度に整然とした。丸山さんは反応が早くて、論理明解、積極的で明るい性格、話も知的で面白く、活達なのだ。ただ、少々気が強い。かつて教室のコンパのとき、名うての永田武教授と差して注ぎつ注がれつ、丁々発止と渡り合って万座を感嘆させたことがあった、と後になって聞いた。本人に問うたら遠くをみる目でとほけて見せた。能力の高い個性的な人がスケープゴートになってしまうのはよくあることだ。自分で確かめもせず伝聞だけに依って判断し、有能な人物を生かせなかった教授達も批判をまぬがれまい。昨年4月からは、丸山さんに私の部屋で秘書役をやってもらった。彼女の事は早く、私の方が追われる身になって、嬉しい悲鳴を上げることになった。だが、もう定年後がない。

過去25年、私は技官の待遇・処遇・研修問題等の改善に関わって来ているので、非常に多くの似た事例を分析的に知っている。最近は大協の専門委員として専門行政職問題に取り組んでいるがこれが給与上の待遇の問題としてだけでは決して解決し得ない事を重ねがさね強調しているのは、そのためである。技術系職員問題の仕事で作成した多数の文書は丸山さんのワープロによる。不思議な因縁と言うほかはない。

地球物理学教室でも少しは状況を改善しようと改革に骨折っている。専行職問題がらみで職員組合の人とよくあうが、先日「お前の膝元で職員を不当に扱っている」と言う糾弾を受けた。それはそれで良い。しかし組合は情緒に流れず、教官の権威に媚びず、職員の諸問題のポイントを事実にもとづいて構造的に理解して貰いたい。専行職問題が膠着状態だったとき、大学の教育研究を支えるこの重要問題は職を賭しても突破したいという主旨の事を言ったところ、ある活動的な技官から「我々なんかのために職を賭すなんて……」と卑屈に侮蔑の混じった応答を得てがっかりしたことがある。トンチンで自分のエゴイズムに忠実な方が学者らしくて尊敬されるということであろう。技官諸氏は自分達の果すべき役割の重要性を認識してもっと誇りをもって欲しい。さもないと教官や事務官から、後ろめたいのではないかと勘ぐられますから。

基礎科学の充実をはかり東大の相対的沈下を回復すべく理学院構想の検討が進められている。夢を論じ、実現に向けて力強く進みたい。だが、上だけをみた教官の局所的エゴイズムは足元を忘れさせやすい。研究教育を下から支えてくれる技官や事務官の事をもっと本気で考えようではないか。大義名分のある一大決戦には一将成って万骨枯るというのもありえよう。しかし科学の研究教育の様に積み上げて行く長丁場の連戦では上だけ向いた教官がいくら旗をふっても研究・教育の実戦力は空洞化するだけであろう。教官は、もっと大局的なエゴイズムを発揮してはどうだろうか。

この一文には、内部告発の匂いがある、大方の批判を得るものと予測している。自分の帰属する集団や組織への忠誠心（不合理な身びいきから良かれとの意図にもとづく造反まで）は、群棲動物として進化してきた我々の本能の一部であろう。ひいきは理不尽でも嬉しく、周知であっても活字にすると人を不愉快にさせ、反撥と黙殺を招く理があるのを承知している。

大学人は自治の認められている島に住む群棲動物の一種である。まっとうな自治には知恵と能力が必要だ。一瞬の平和を望み続けて沈没に身を任せるか、局所的には少々破壊的でも大局的には建設的な造反も養って力をつけるか、知と良心の府が選択と行動を求められている。

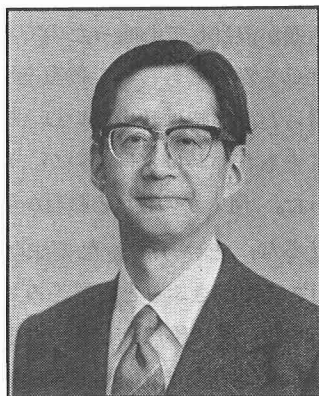
丸山さんを送るに当たって万感横溢。彼女はこの一文を恨むまいか。

平川浩正先生の思い出

坪野公夫（物理学教室）

昭和61年11月18日午後10時48分、理学部教授平川浩正先生は虎ノ門病院にて、敗血症でお亡くなりになりました。57年間の生涯でした。

食物がどうもうまく飲み込めないと異常を訴え、病院へ行って食道の内視鏡検査を受けている最中に大量出血し、そのまま慌ただしく入院という事態になったのは、その約1年前のことでした。結局今回の疾病は5年ほど前にもそのため入院・手術をしたことのある胸部疾患の再発だったわけです。食道に穴があいたせいでそれから間もなくして、飲食を一切やめさせられ外部からの摂取は点滴だけに頼るということになりました。かねがね美味しい物を食べるのが趣味だとおっしゃっていた先生にとって、辛い状態が最後まで続きました。それでも先生は明るく「食事にとられない分だけ時間をたっぷり使えていいんだよ」と、おっしゃっていました。実際、過酷な条件であるにもかかわらず、ある時はベッドの上に座りながら、またある時はベッドに横たわりながら、先生は入院中とは思えないほど精力的に仕事をおやりになっていました。今から思うと、まるで残された時間を惜しむかのように、15年前に出版した相対論の教科書の大幅な改訂に取り組み、ついに入院中にそ



れを完成させました。そうして出来上がった改訂版の序文の最後を「虎の門にて」と結んだ時の先生の心情を察すると、胸が熱くなるのを押さえることができません。

先生は昭和27年東京大学理学部物理学科を卒業し、引き続き研究奨学生として大学院に進み、これを修了後昭和32年日本原子力研究所研究員に採用されました。昭和36年本学の助教授として着任され、昭和52年に教授に昇任されてからは理学部物理学科力学第二講座を担当されていました。

先生の学問的業績は、原子・分子のマイクロ波分光學、線型加速器、特に加速器のビーム電流と

加速空洞との相互作用によるビーム不安定性の研究、陽子・重陽子の動的スピン偏極を中心とする物性物理学、そしてその後に着手して最期に至るまで継続した重力波および重力の研究等々物理学の広い分野にまたがっています。

先生がこの20年近くもっとも情熱を注いだ研究課題は、アインシュタインの一般相対性理論からの帰結である重力波を実験的に検出することでした。重力波の検出という、未だ誰も成功していない困難なテーマを選んだのは、相対論からの帰結としての重力波に魅力を感じたのと、未開拓の分野にチャレンジする精神があったからだと思えます。重力波検出の分野では、諸外国のグループには真似の出来ない斬新なアイデアを次々に出し、それを具体化して着実な成果をたくさんあげています。さらに最近では、重力波検出の技術を応用して、重力の基本的性質（逆2乗則）を調べるというユニークな研究も世界的に注目されています。重力波と重力の理論的および実験的研究において、先生は世界的な指導者の1人となって活躍し、また同時に東大理学部をこの分野の世界的な拠点の1つとしました。これらの領域で特筆すべき先生の業績は数多くありますが、いずれも卓越した数理物理学的考察と独創的な着想にもとづくものばかりであります。

昭和61年度より、検出感度の大幅な向上を目指した重力波次期大型プロジェクトが始まりました。実験計画や実験装置の考察、設計等について、最初の頃は先生が病床から直接指揮をとられていました。しかし8月の下旬頃からは、私達が面会に行っても先生はどこか具合が悪そうで、いろいろご相談したかったのですがそれも出来ずに帰るといふ日が多くなりました。先生も半ばで力が尽きてとても残念だったに違いありません。病床の中で、うわ言のようにこの計画の進行を気づかっていたと聞きます。

平川先生は研究ばかりでなく、教育ということに対してもとても熱心でした。それは物理の教科書「電磁気学」、「相対論」、「電気力学」、「力学」

等の名著を残されたことにも表れています。これらの本の中には、数学的基礎づけをきちんとやりながら、かつ物理的直感を重視するという先生の学風が貫かれています。また、大学にいるときには、毎日のように私達のいる地下の実験室に降りてきて、1人ずつ実験の進行状況を尋ねたり、研究上のアドバイスを授けて下さいました。何かトラブルが起きたときには、先生に聞けばいつもの確な解決法を示してくれる、という安心感が私達にはありました。先生がいつも口にするのは「教育的見地」という言葉でした。たとえ全体の研究がそれによって滞ることがあっても、研究室の中では常に教育ということを最優先に考えそれを実行していました。

11月25日、信濃町の千日谷会堂でとり行われた先生の告別式で、バックに流れたA. Brendel 演奏の Beethoven ピアノソナタ31番は、病床で先生が自ら万一の時にはと指定した曲でした。クラシック音楽を愛し、自らピアノを弾き、油絵を描いた趣味の広い先生でした。先生にはまだまだこれから、たくさんのことを教えて頂くつもりだったのでもう取り返しがつきません。ただただ残念でたまりません。

渡辺武男先生を偲ぶ

飯山敏道（地質学教室）

元理学部長（昭63～65）渡辺武男先生は、虚血性心疾患のため、昭和61年12月18日逝去された。享年79歳であった。昨年6月頃までは、毎週金曜日の夕方行方。地質学第3講座のゼミナールに来られ、熱心に学生達の話聞かれ、先生が興味を持たれると、その学生を後で激励して下さっていた。数年前からパーキンソン氏病にかかれ、お手足が段々御不自由になるのを、つとめて手足を使って、防いでおられた。数度か路で転ばれ、御家族が御心配になって、外出をおひかえになるようおっしゃっても、機会を作っては、鉾山に鉾床の産状や鉾物を見にお出かけになると言う頑張りようであった。先年渡辺先生が長野県の浜横川の鉾山は面白いから機会があったら行って来なさいと言われ、講座総出で行ったことがある。小さな閉山寸前のマンガン鉾山で、枯れ葉が積った山道を登って行く丘の中腹にある。ややもすると枯葉に足をすべらすので、少し緊張する所であった。鉾山の方の話で、先生は数ヶ月前に来られましたとのことであった。一同先生が無事であってよかったと痛感したのであった。一高時代にサッカー部におられたことや、御尊父が非常な国際派の海軍将校であられたこともあって、ファイトの上では先生の右に出る者は稀であったのではなからうか。

強いファイトの持主であったが、先生の下に居ると、先生のどこに、あれ程のファイトがひそんでいるか知らずと思ってしまう。それ程温和一筋のお方であった。皆が研究上のことで、“ああでもない”“いや、それはおかしい”。などと一つの問題の核心にふれられず、堂々めぐりをしていても先生は微笑をたたえて、聞いておられるだけである。ゼミの時間はどんどんたって、4時に始まったのが8時になっても終り相もない。結局皆がくた



びれて、お開きになるのだが、先生は何も言われない。先生に御意見を求めても、両方の意見の中の正しい点を云われるだけで、先生に判事役をお願いすることは出来なかった。先生がはっきり物を言われるのは、こちらから先生の御経験を伺う時だけであった。それも、公の席では、かなり総括的なことに止るのが常で、個人的に伺った時にはじめて、詳しく、先生の観点を説明して下さるのであった。先生がお亡くなりになって後、御家族、御親族の方とお話した時、渡辺先生が怒られたのを見たことがないと言うのが皆様の一致した憶い出であった。このように先生は公私両面において、柔和な方であった。

科学上の御研究でも、先生のアプローチは独特であったとしか言いようがない。私共の分野では火山、温泉などごく一部の現象を除くと、岩石、鉾物の生成過程を目で見ることができない。地下深所で起ることであり、たとえ見ることができたとしても、少くとも百万歳まで生きなければ見られない。見ることができるのは、その現象の最終生成物である岩石、鉾物だけなのである。凡人の我々は、せっかちだから、ある程度見切りをつけ

て、仮定を立て、その仮定がなりたてば、こう言うことがある筈だと、これを支持する事実を探すのに夢中になってしまう。渡辺先生の場合は、まず岩石や鉱物を詳細に観察される。しかし何も言われない。詳細さは驚く程なのだが、何故何も言われないのかと、不思議に思われる程なのである。やがて、脇の人に、“こうではないかと思う”と言われ、皆が“あ”と思わせられるのであった。先生は、観察を通じて、自分御自身が対象と一致してしまう時を待たれる。一致して、混然一体となると、そこから岩石の生成過程の姿が見えて来ると言う訳である。

深海潜水艇による深海底の観察がしばしば行われ、海底の火山活動に伴って、銅、鉛、亜鉛、金、銀など有用金属濃集の場が形成されるのが目のあたりに観測されるようになった今日では、この鉱床は昔海底で起った火山活動に伴って形成されたが今は陸化して、鉱山として開発されているのだと言っても、これを疑う人はいない。しかし、このような観察事実がまだ知られていない時点で、この可能性を指摘し、多くの人をして、このことの証拠を沢山見出させた人は少い。それが渡辺先生その人であったのである。

私達が学生であった昭和25~26年頃には、まだ先生にこのお考えは固っておられなかったようである。今は閉山になってしまった別子銅山で代表される含銅硫化鉱床のお話をされた時、先生は、鉱液が結晶片岩のひだを通して昇って来てこの種の鉱床が形成されたように云われた。又東北地方に存在する黒鉱クロコウのお話でも、凝灰岩を主とする第3紀層のある層準に撰択的に鉱液がしみこんで、岩石をおきかえて、これ等の鉱床が形成されたと言うふうにお話しされ、私達は何とも不思議で、納得できないまま鉱床学の単位を頂いて卒業してしまったのであった。その後先生は多くの学生の卒論のフィールドとして、これらの鉱床の調査をさせられ、御自身も足繁くこれらの鉱山に出掛けられ、観察しておられた。やがて、これらの鉱山の鉱床は、そのまわりの岩石（母岩）と同時に形

成された可能性が強いと言うことを言われ、学生達に留意して観察することをすすめられた。又黒鉱については、この鉱石の粒は他所で形成されたのが移動して来て堆積したものではないかと言う疑問を投げかけられた。先生の研究の成果は、何時もこのように淡々とした雰囲気の下で世に知れて行くのであった。新しい見解であるから、すぐ世人にうけ入れられない。反対する人も出る。先生はこれに対し、殆んど反論らしい反論もされないうで、聞く側に立たれていた。やがて論文がいくつか、先生御自身又は門下生によって発表され、日本および世界の人が静かに注目し始めると言う過程をたどるのであった。何時しかKUROKOの単語がそのまま外国人の書く論文は使われるようになったのである。

先生のこのやり方は、人と人との関係でも同じで、黙って皆の意見をきかれるだけの先生なのに、何時の間にか最も妥当な方向に皆の考えがまとまって行くのであった。こんな訳で、種々な会議、委員会は競うように、先生に御出馬を願うようになってしまって、先生の教授室のお席は温まるひまもなくなってしまった。頼まれれば断わることが出来ない先生に、皆は次から次に先生に重荷を課したのである。日本のみならず、国際委員会からも所望され地球をまたぐ先生の毎日が始まってしまった。

当時パリに在住していた私は、月曜に先生が着かれたとのお電話を頂き、一夕お目に掛り、木曜にお発ちになる時、“又来週水曜日に来ます”と言われ、呆れてしまったことがある。

とうとう先生は理学部長に選挙され、お忙しい日々の中で、折さえあれば時間を盗むように、研究を続けておられた。御定年後も、名古屋大学教授を同学の定年まで勤められた後、秋田大学学長に就任され、東京-秋田間を往復される時期が始まった。この重責にも、先生は、持ち前のファイトをもって当られ、諸事を処理しておられた。この期間で最も大変だったのは、大学粉争ではなかったかと思われる。トラックの荷台に立って、マイ

クを持って、学生に、“この渡辺をどうか信頼して呉れ”と学生を説かれ、事態を収拾されたと言う武勇伝も残っている。

この一連の渡辺先生の日常について、“先生は何時も、研究三昧にもどりたいと言っておられるのに何故、行政的なことを承諾されるのか、断ればよいのに”と言う人もいた。私は、これは、先生の気持を理解していないこともおびただしいことだと思う。先生は恐らく“自分がこの苦役をひきうければ、誰かが助かる。場合によっては、前途ある若い人がその研究のポテンシアリティをあげる時間を持つことができるかも知れない”と考えて、苦役を背負ってしまわれると言うのが先生の心情であったと私は思う。先生と総合研究資料館のことや、発見された新鉱物の事等も記したいがこのことについては、資料館がすでに立派な出版物を出されているので、重複をさげさせて頂く。

さきに筆者は、坪井誠太郎先生の追憶も書かせて頂いた。私共は、坪井、渡辺両先生に相次いで逝かれ、まことに心細い思いをしている。両先生を思う時、研究における真理へのアプローチの仕方といい、学界、大学内、大学外における御活動の仕方といい、非常に対称的であったように見えるかも知れない。

しかし、結果的には、お2人とも非常に多くの貢献をされたのである。このことは、自然、精神両面において、人間が真理を探究する道にはある定まった方法、フォーマットなどと言うものは存在せず、探究者は持って生れた性格と生い立ちに従って自由にその方法を編み出してよいことをお2人の先生が身をもって示されたのだと思う。そして両先生に共通している。謙虚で詳細な観察、深い洞察、そして良心に恥ずることない誠意は、探究者としての必須条件であることをも語って下さっているのではなからうか。

《 学部 消息 》

教 授 会 メ モ

61年9月10日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 学部研究生の期間延長について
(4) 企画委員会大学院構想検討小委員会報告
(5) 企画委員会建物小委員会報告
(6) 教務委員会報告
(7) その他

61年10月15日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認

- (2) 人事異動等報告
(3) 学部学生の休学について
(4) 教務委員会報告
(5) 人事委員会報告
(6) 会計委員会報告
(7) 企画委員会建物小委員会報告
(8) 企画委員会報告
(9) その他

61年11月19日(水)

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 昭和62年度文部省内地研究員の受入れについて

- (3) 人事委員会報告
- (4) 企画委員会建物小委員会報告
- (5) 企画委員会大学院構想検討小委員会報告
- (6) 企画委員会報告
- (7) その他

- (8) 企画委員会大学院構想検討小委員会報告
- (9) 企画委員会報告
- (10) 理学部長候補者の選出について
- (11) その他

61年12月17日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題
- (1) 前回議事録承認
 - (2) 人事異動等報告
 - (3) 人事委員会報告
 - (4) 教務委員会報告
 - (5) 会計委員会報告
 - (6) 企画委員会報告
 - (7) 企画委員会建物小委員会報告
 - (8) 企画委員会大学院構想検討小委員会報告
 - (9) その他

62年2月18日（水）定例教授会

理学部化学本館5階講堂

- 議 題
- (1) 前回議事録承認
 - (2) 人事異動等報告
 - (3) 東京大学理学部規則の改正について
 - (4) 転学部について
 - (5) 学部学生の休学延長について
 - (6) 奨学寄附金の受入れについて
 - (7) 人事委員会報告
 - (8) 企画委員会報告
 - (9) 企画委員会建物小委員会報告
 - (10) 企画委員会大学院構想検討小委員会報告
 - (11) 評議員の選出について
 - (12) 素粒子物理国際センター長の選出について
 - (13) 分光化学センター長の選出について
 - (14) 次期遺伝子実験施設長について
 - (15) 人事委員会委員及び会計委員会委員の半数改選について
 - (16) その他

62年1月21日（水）定例教授会

理学部化学本館5階講堂

- 議 題
- (1) 前回議事録承認
 - (2) 人事異動等報告
 - (3) 昭和62年度情報処理関係内地研究員の受入れについて
 - (4) 奨学寄附金の受入れについて
 - (5) 附属植物園利用規則の一部改正について
 - (6) 人事委員会報告
 - (7) 教務委員会報告

理学博士の学位取得者

〔昭和61年11月26日付（4名）〕

専 門 課 程	氏 名	論 文 題 目
論 文 博 士	村 上 睦 明	T C N Q 塩の結晶化と相転移に関する研究

論文博士	前原 潤	グラフのプロットと次元
論文博士	小川 温子	レクチンと糖との相互作用
論文博士	林 祥介	「水惑星モデル」でシミュレートされた30-40日周期振動

〔昭和61年12月22日付（4名）〕

論文博士	森岡 瑞枝	ウニ初期卵割期胚細胞周期におけるS期調節機構に関する研究：S期開始シグナルとしてのAP ₄ A
論文博士	日和佐 隆樹	発癌プロモーターなど発癌関連因子によって合成促進される新しい蛋白質（p32）
論文博士	稲垣 慈見	ディスクアンドウォッシャー型加速空洞
論文博士	杉江 明彦	メタノプロスタサイクリンおよびベンゾプロスタグランジン関連物質の合成

〔昭和62年1月26日付（4名）〕

論文博士	山下 光男	硫黄の特性を利用した環状ケトン類の合成
地球物理学	阿部 豊	地球型惑星の初期進化：集積過程，大気形成及び熱的進化 〔阿部豊氏の論文は修業年限の特別による特例審査〕
生物化学	中山 直樹	DNA複製の開始とその制御に関する研究：酵母接合因子による細胞分裂停止の機構と，大腸菌複製タンパク質dna Bとdna Cの構造と機能
論文博士	正井 久雄	大腸菌におけるDNA複製開始機構についての研究——R1プラスミドの複製開始およびプライモソームとその構成タンパク質についての研究——

人 事 異 動

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	教授	平川 浩正	61. 11. 18	死亡	
"	助教授	青木 秀夫	61. 12. 1	昇任	筑波大 講師より
地物	"	中澤 清	62. 1. 1	"	東工大 教授へ
物理	"	大塚 孝治	62. 1. 1	採用	
地殻	"	野津 憲治	62. 1. 1	昇任	筑波大 講師より
物理	教授	菅原 寛孝	62. 1. 16	併任	本務：高エネ研 教授
"	助教授	十倉 好紀	62. 1. 30	休職	

地物研	助 教 授	林 幹 治	62. 2. 1	昇 任	助手より
化 学	講 師	清 水 洋	62. 2. 1	"	"

(助 手)

物 理	助 手	城 所 俊 一	61. 11. 16	採 用	
"	"	陶 山 明	61. 12. 1	昇 任	長岡技科大 助教授へ
化 学	"	葉 袋 佳 孝	61. 12. 2	休 職	62. 10. 29 まで
物 理	"	藤 井 啓 文	62. 1. 1	昇 任	高エネ研 助教授へ
数 学	"	中 島 匠 一	62. 1. 1	"	教養学部 助教授へ
物 理	"	石 井 克 哉	62. 1. 16	復 職	
"	"	前 田 恵 一	62. 1. 16	採 用	
生 化	"	芝 清 隆	62. 1. 16	"	
数 学	"	齋 藤 毅	62. 2. 1	"	
天 文	"	林 正 彦	62. 2. 1	"	

(職 員)

物 理	事 務 官	太 田 由美子	61. 12. 31	辞 職	
人 類	"	草 野 京 子	61. 12. 31	"	
中間子	"	増 田 真由美	62. 1. 1	採 用	

外国人客員研究員

所属	受入れ教官	国	籍	氏 名	現 職	研究期間	備 考
天 文	祖父江 助教授	西	独	Ernst Fürst	マックスプランク電波天文学研究所研究員	61. 9. 20 ~ 61. 10. 20	
情 報	榎本助教授	大 韓 民 国	鄭 丸 黙	暁星女子大学校助教授		61. 11. 1 ~ 62. 10. 31	
数 学	塩田助教授	フ ラ ン ス	Lucien SZPIRO	フランスCNR S主任研究員		61. 12. 23 ~ 62. 1. 20	日本学術振興会
物 理	小林 教授	フ ラ ン ス	Henri Alloul	フランスCNR S主任研究員		62. 3. 15 ~ 62. 4. 15	日本学術振興会
素粒子	小柴 教授	ア メ リ カ	Louis Padulo	ボストン大学教授		62. 1. 1 ~ 62. 12. 31	
物 理	上村 教授	フ ラ ン ス	Christine Fretigny	フランスCNR S主任研究員		62. 2. 1 ~ 63. 1. 31	

物理	宮沢 教授	ベトナム	Nguyen Van Hieu	ベトナム国立科学センター 総長	62. 2. 9 ~ 62. 3. 10
天文	祖父江 西 助教授	独	Patricia Reich	マックスプランク電波天文学研究所研究員	62. 3. 1 ~ 63. 2. 29
天文	祖父江 西 助教授	独	Wolfgang Reich	マックスプランク電波天文学研究所研究員	62. 3. 1 ~ 62. 9. 30

海外渡航者

(6ヶ月以上)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
地物研	助手	岩上直幹	アメリカ合衆国	61. 10. 16 ~ 62. 10. 15	大気物理学研究のため
物理	助手	小野喜之	ドイツ 連邦共和国	61. 11. 17 ~ 62. 11. 17	物理学の研究のため
素粒子	助教授	小林富雄	スイス	62. 1. 3 ~ 63. 3. 30	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
地物	助手	比屋根 肇	アメリカ合衆国	62. 1. 4 ~ 62. 5. 31	カルフォルニアバークレーにおける天然ガス・温泉ガス中の希ガス研究プロジェクトに参加のため
地質	助手	阿部勝己	スウェーデン フランス 連合王国 ドイツ 連邦共和国	62. 1. 16 ~ 63. 1. 15	介形虫の形態の種内変異に関する研究のため

理学部7号館の竣工について

このたび理学部7号館が1号館南側に完成し、2月2日(月)に学内外の関係者に披露された。

この建物は地下1階、地上7階建物延面積4,409㎡あり、理学部情報科学科と本学遺伝子実験施設が入っている。

情報科学科は1階に事務室、2階に教官室・講義室・演習室・会議室、3階に図書室・実験室・大学院関係研究室等があり、実験室には各種計算機や端末を設置し総合的な研究開発を行なう。4階に端末室・学生実験室・大学院関係研究室・講義室等があり、端末室には主計算機の端末30台を設置し、講義演習を行なう。5階に計算機室・実

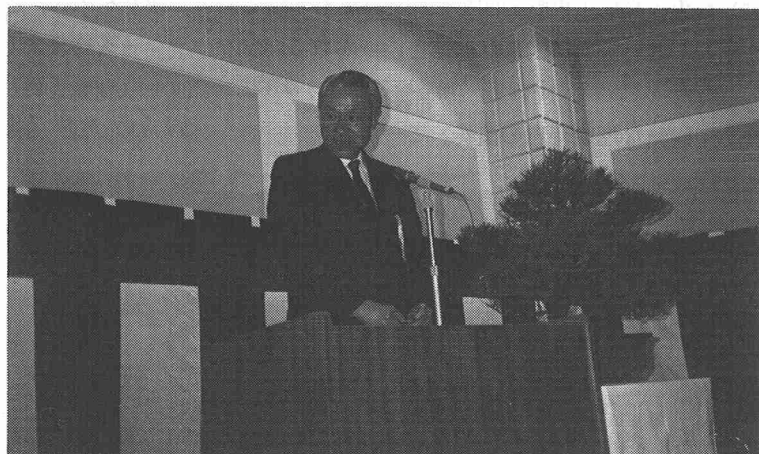
験室・教官室・技官室があり、計算機室には主計算機(計算機本体・ディスク装置等は6階)が設置され光ネットワークや専用通信回線で、端末室、実験室などの各室と結んで、情報科学の基礎と最先端の研究教育を総合的に行なう。

遺伝子実験施設は、6階に施設長室・教官室・共同利用研究室・電子顕微鏡室・植物栽培室・動物飼育室・微生物培養室等が、7階に組換えDNA実験のためのRI管理室・動物・植物の各P1実験室及び高度封じ込め実験室・微生物P1・P2各実験室・低温室・滅菌室・計測器室等がありRI管理室を除き7階は全室がRI管理区域とな

っている。各室の諸設備も整って遺伝子に関する先導的研究を推進するとともに、本学の種々の生命科学の分野の学部・大学院における組換えDNA実験技術の研究教育に貢献することが期待され

る。

情報科学・遺伝子実験いずれも科学の最先端をゆく学問であり、建物もそれにふさわしい体裁と設備を整えたものである。



理職創立40周年記念パーティについて

昨年（1986年）12月23日、理学部職員組合（理職）は創立40周年を迎え、これを記念して、同日、好仁会会議室にて有馬理學部長、野上耀三名誉教授（理職OB）、西田東大職員組合委員長ら、OBや来賓の方々を迎えて盛大なパーティーが開かれました。

第1部は、記念式典めいたもので、「学問研究の中心たる大学の再興」を訴える有馬理學部長、

「一人一人の職員の願いを大切にする組合活動の前進」を期待する西田東職委員長らの挨拶をうけて、佐伯教授（記念事業実行委員長）の音頭で乾盃。

第2部は、理職ヤングが製作のスライドで、理学部の職場の様子が紹介されたあと、20名近いOBの方々により「理職の40年」がインタビュー形式で語られました。この中で、1969年の東大斗争

(紛争) 時東大当局側交渉委員であった野上燿三氏と、東職側の交渉メンバーであった佐々木敏昭氏(現東職書記長)とが、「職員は大学自治の担い手である」という一節を含む歴史的な文書(いわゆる東職確認書)が東大当局と東職の間で調印されたいきさつを紹介、若い職員に大きな感銘を与えました。

第3部は、一転して陽気な理職有志の演奏。こ

の日のために一ヶ月間練習を重ねた成果を披露。80名余りの出席者の大きな拍手をあげました。最後に関理職副委員長が「すべての教職員が思う存分力を発揮できるような理学部をつくるために理職も頑張る」と、決意をのべ、さわやかで活気あふれる記念パーティーを終わりました。

(理職委員長 林 幹治)



理学部長と理職の交渉

理学部長と理学部職員組合との交渉は、この間昭和61年11月26日、12月15日、昭和62年1月19日におこなわれた。主な内容は以下のとおりである。

1. 専門行政職俸給表適用問題について

国大協が、11月12日に、文部省の技術職員待遇改善検討会第2次案に対する見解を発表したことを受け、理職は、今後の見通し等について、学部長の見解を求めた。

学部長は、専門行政職俸給表を昭和62年4月から適用することは、困難であること。また、技術職員の組織化については、現在は考えていないが、必要な時期がくれば検討する、と回答した。

2. 事務職員の待遇改善について

理職は、一昨年(昭和61年)4月に3級で事務室主任に昇任した者について、早急に4級に昇格できるよう、強く要請した。これに対し学部長は学部としても速やかな昇格が望ましいと考えており、努力中である。と回答した。また、理職は、秘書室の事務官の4級昇格の道を開いてくれるよう要望した。これに対し、学部長は、異動しては困る職場なので、異動しないで昇格できるよう検討したいと回答した。

3. 教務職員問題について

理職は、40代半ばで給与の頭打ちが生じる教務職員について、高齢者を早急に助手に振替え、頭打ちを解消させること、また将来的には制度廃止

が望まれることを述べ、学部長の見解を求めた。これに対し学部長は、個人的見解としては教務職員制度は廃止すべきと考えている。また定年間近の人については、できる限り早期に助手振替が実現できるよう学部として努力している、と回答した。

4. 理学院（仮称）構想について

理職は、東京大学を大学院大学化する構想について、全学のおよび理学部での動向について尋ねた。学部長は、国立大学共同利用機関の総合研究大学院の設立構想が煮詰ってきており、大学の大学院も新しい構想のもとで充実をはかりたいと考えている。

理学部では、企画委員会の中にワーキンググループを作り、構想を検討中で、1月中には、中間報告が提出される予定である。中間報告等、ある程度まとまった段階で広報に掲載し、意見を求めたい。全学的にも動きはあるが、理学部での構想が一つの試案になるものと考えている。と回答した。

5. 理学部1・3・5号館中央化構想について

標記の問題について、理職は、非常に急ピッチに構想が具体化し、職員には、構想が検討されている事実を知らない人もおり、情報があまりにも

少なく、不安が広がっている現状を訴え、詳しい内容を尋ねた。これに対し学部長は、1号館の現在の敷地に高層の新1号館を建設し、そこに1・3・5号館と、2号館で移転を希望する教室を移したい。基本的には、現在の教室単位の組織をそのまま移転させることを考えている。計画については、建物小委員会の下にワーキンググループを作り、検討中である。計画については、中間案ができた所で、広報に掲載し、教職員・学生を含め、広く意見を聞きたい。昭和63年度の概算要求にのせる意向である。と回答した。

6. 天文台改組問題について

理職は、これまでの交渉での、標記問題については、東大の研究・教育を阻害しないことが承認の条件であるとする学部長見解（「理学部広報」18巻3号、14ページ）をうけて具体的な支障と対策を尋ねた。学部長は、天文台の分離・改組は、理学部、とくに天文学教室の教育・研究に大きな影響を及ぼすもので、基本的には好ましくない。天文台の5部門程度、観測所等の施設を理学部に残すよう要求している、と回答した。

7. その他

行()職員の行()振替、定員外職員の定員化等が、継続的に議論された。

編 集 後 記

今回は理学部を退官される方々と、それを送られる方々から、計20余りの原稿を頂きまして有難う御座居ました。次号から編集員が一部交代いたします。

理学部広報の発行についてこの一年間学部内外各方面の御協力を仰ぎました。謹んで御礼申し上げます。

(佐佐木)

編集：

佐佐木 行 美 (化学)	内線	4359
佐 藤 勝 彦 (物理)		4207
松 野 太 郎 (地物)		4294
高 橋 正 征 (植物)		4474
田賀井 篤 平 (鉱物)		4544

印刷.....三鈴印刷株式会社